



ILCAA

アジア・アフリカ言語文化研究所

Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa

東京外国語大学

要覧2007

A Guide to Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa



目次

概要

■ 所長あいさつ	01
■ 沿革	02
■ 研究所の基本目標	03
■ 研究組織構成	04
■ 研究および運営に関する評価体制	06

臨地研究に基づく研究拠点

■ 共同研究プロジェクト	08
重点共同研究プロジェクト	09
一般共同研究プロジェクト	10
所外代表による共同研究プロジェクト	21
■ 研究者招へい	22
■ シンポジウム・ワークショップ	23
■ 外国研究機関との共同研究	25
■ フィールドサイエンス研究企画センター(FSC)	27
■ 中東イスラーム研究教育プロジェクト(MEIS)	28
■ 東南アジアのイスラーム — トランスナショナルな連関と 地域固有性の動態(ISEA)	29
■ 中東研究日本センター(JaCMES)	29
■ 研究未開発言語文化の調査事業	30
■ 競争的研究経費などによる研究	31

研究資源拠点

■ 情報資源利用研究センター(IRC)	34
■ 音声学実験室	36
■ アジア書字コーパス拠点(GICAS)	37
■ 文献資料コレクション	38

研究者養成のための教育・広報活動

■ 言語研修	40
■ 大学院教育/日本学術振興会特別研究員	41
■ 出版物/ウェブサイト	42
■ 研究成果の公開・社会還元	44
■ 研究スタッフ	45
■ 予算	55

所長あいさつ



アジア・アフリカ言語文化研究所所長

大場和夫

アジア・アフリカ言語文化研究所(略称:AA研)は、アジア・アフリカの言語・文化に関する総合的研究を目指して1964年に開設されました。高度成長を迎え、東京オリンピックが開催された年であり、新興の独立国を抱えるアジア・アフリカに対する関心が高まってきた時期でもあります。以来、本研究所は、所外の研究者にも開かれた「全国共同利用研究所」として、関連する研究者コミュニティとの密接な提携を維持しながら、日本におけるアジア・アフリカ研究を第一線で主導してきました。国内外の研究者を集めた共同研究・シンポジウム、海外調査の組織化、研究資料の蓄積と公開、言語研修をはじめとする若手研究者の養成、辞典・語彙集の編纂などが主たる活動です。

近年、「グローバル化」によって世界の人々の生活様式が均質化されると喧伝されています。人間、物資、情報などの移動・流通・伝達が加速かつ効率化され、とくに都市部では類似したライフ・スタイルがみられるようになったことは確かです。しかしそれは、世界が単一の文化、ましてや唯一の言語で覆われることを意味してはいません。むしろグローバル化の時代であるからこそ「文明の衝突」が論じられ、危機言語問題などが顕在化してきているといえましょう。いまや65億ほどの地球(グローブ)に暮らす人々の多様な言語・文化のあり方、とりわけグローバリズム論でしばしば見落されがちなアジア・アフリカに住む人々の生活の実態を研究することの重要性と必要性は、いっそう増しているのです。

本研究所は国立大学法人東京外国語大学の附置研究所ですが、全国共同利用研究所として、法人の枠を越えて国内外の研究者と広く連携した調査・研究活動を展開することをもっとも重要な使命としております。国立大学法人化以降、わが国における高等学術体制の変化は急であり、研究活動の進展はもとより、組織運営にもかなりの時間を割くことを求められるようになってきました。さまざまな社会的要求にも対応しながら、それでも本研究所スタッフは、学術研究の本来の姿である開かれた知の拠点を構築すべくいっそうの努力をする所存です。皆様のご指導・ご支援をお願い申し上げます。

グローバリズム論でしばしば見落とされがちな
アジア・アフリカに住む人々の生活の実態を研究すること

Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa
Tokyo University of Foreign Studies

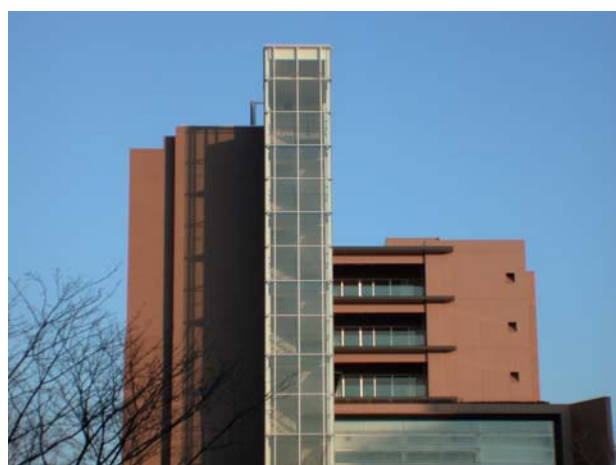


沿革

年度	事項
1961(S36)	日本学術会議がアジア・アフリカ諸国についての研究を進めるための共同利用研究所を設立するよう政府に勧告。
1964(S39)	アジア・アフリカ言語文化研究所が東京外国語大学に附置。 わが国最初の人文科学・社会科学系共同利用研究所。
1967(S42)	研究未開発地域への助手等の現地投入を開始。
1974(S49)	言語研修を本格的に開始。
1978(S53)	メインフレーム・コンピュータを導入。
1983(S58)	海外学術調査(当時、国際学術研究)総括班の事務局が置かれる。
1991(H3)	研究体制の抜本的見直しを行ない、従来の小部門制(及び1客員部門)から4大部門制(及び1客員部門)をとる。
1992(H4)	東京外国語大学大学院地域文化研究科に設置された博士後期課程の教育に所員が参加。
1995(H7)	文部省から「卓越した研究拠点(COE)」に指定される。
1996(H8)	COEとして初の国際シンポジウム「東南アジアにおける人の移動と文化の創造」を開催。
1997(H9)	附属情報資源利用研究センターを設置。
2001(H13)	中核的研究拠点形成プログラム(2002年度に文部科学省科学研究費補助金特別推進研究に移行)「アジア書字コーパス拠点」が発足。(～2005年)
2002(H14)	旧西ヶ原キャンパスから現在の府中キャンパスに移転。 文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「資源の配分と共有に関する人類学的統合領域の構築—象徴系と生態系の関連をととして」が発足。(～2006年)
2004(H16)	東京外国語大学、国立大学法人になる。
2005(H17)	複数の研究ユニットからなるプロジェクト研究部を設置。 フィールドサイエンス研究企画センターを設置。 中東イスラーム研究教育プロジェクトを開始。 中東研究日本センターをレバノン共和国のベイルートに開設。
2006(H18)	文部科学省の「世界を対象としたニーズ対応型地域研究推進事業」枠により「東南アジアのイスラーム～トランスナショナルな連関と地域固有性の動態(略称ISEA)」を開始。

■歴代所長

岡 正雄	1964年—1972年
徳永 康元	1972年—1974年
北村 甫	1974年—1983年
梅田 博之	1983年—1989年
山口 昌男	1989年—1991年
上岡 弘二	1991年—1995年
池端 雪浦	1995年—1997年
石井 溥	1997年—2001年
宮崎 恒二	2001年—2005年
内堀 基光	2005年—2006年
大塚 和夫	2006年—



研究所の基本目標

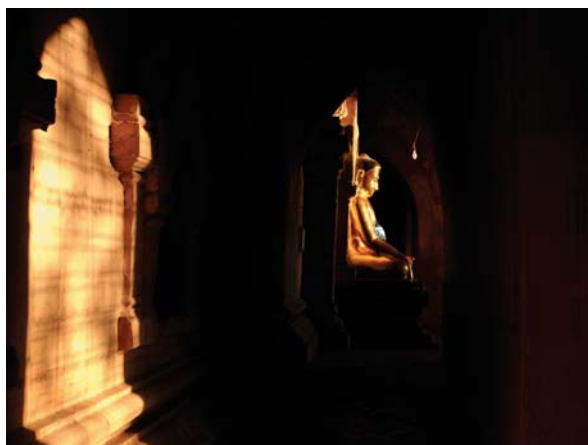
発足当初の本研究所の設置目的は、(1)アジア・アフリカの言語文化に関する総合的研究、(2)アジア・アフリカ諸言語の辞典編纂、(3)アジア・アフリカ諸言語の教育訓練の三つでした。

設立後40年を経て、アジア・アフリカ地域の政治・経済・社会の急激な変化や、既存の研究分野を乗り越えた新しい学問・理論構築の要請、情報処理技術の革新といった状況の変化を受け、当初の設置目的を見直すことが必要となりました。

2004年4月の国立大学法人化に際し、これまで以上に、日本のそして国際的な人文社会科学研究をリードする研究拠点としての役割を強化していく期待が寄せられていることに鑑み、本研究所では、これまでの設置目的を発展させ、以下の長期的な基本目標を掲げることとしました。

長期的な基本目標

- 1 臨地研究(フィールドサイエンス)を核とした国際的研究拠点として国際的水準の研究を先導するにふさわしい研究領域を設定し、国内外の共同研究プロジェクトを推進する。
- 2 アジア・アフリカ諸地域の言語・文化等に関する研究資料・情報を研究資源として利用可能な形に編纂し、それを国際的に共有するための研究資源拠点としての活動を進める。
- 3 国内外の後継研究者の養成に努めるため、研究所の創設以来の歴史を持つ言語研修・研究技術研修・出版・広報活動の、いっそうの充実を図る。



ミャンマー連邦バガン、ティーローミンロー寺院 撮影者：澤田英夫

これらの基本目標を遂行するために、次の三つの戦略的な研究軸に基づいて、動的な研究活動を推進します。

戦略的な研究軸

■言語態に関する基礎研究

言語を常に人間のコミュニケーション文化の中で捉え、臨地研究(フィールドサイエンス)の成果とそのコーパス化による実証的な研究を基盤として、言語情報科学の成果を活用しつつ、従来の言語学の方法論および言語観自体をも基礎から問い直すに至る根幹的な研究を推進する。

■地域生成に関する研究

人間が活動し、社会関係を成り立たせる場として地域をとらえ、多様な伸縮性に富む地域の生成過程のダイナミズムを研究し、現代のアジア・アフリカで生起する諸問題に対し、時間軸を重視しつつ複眼的視座を提供する。

■文化の伝承と形成に関する基礎研究

人間文化のアジア・アフリカ諸社会における現実態について、フィールドワークに基づきミクロおよびマクロな観点からの実証的研究を行うとともに、人類史的視野の中で文化の理論的探究を行う。

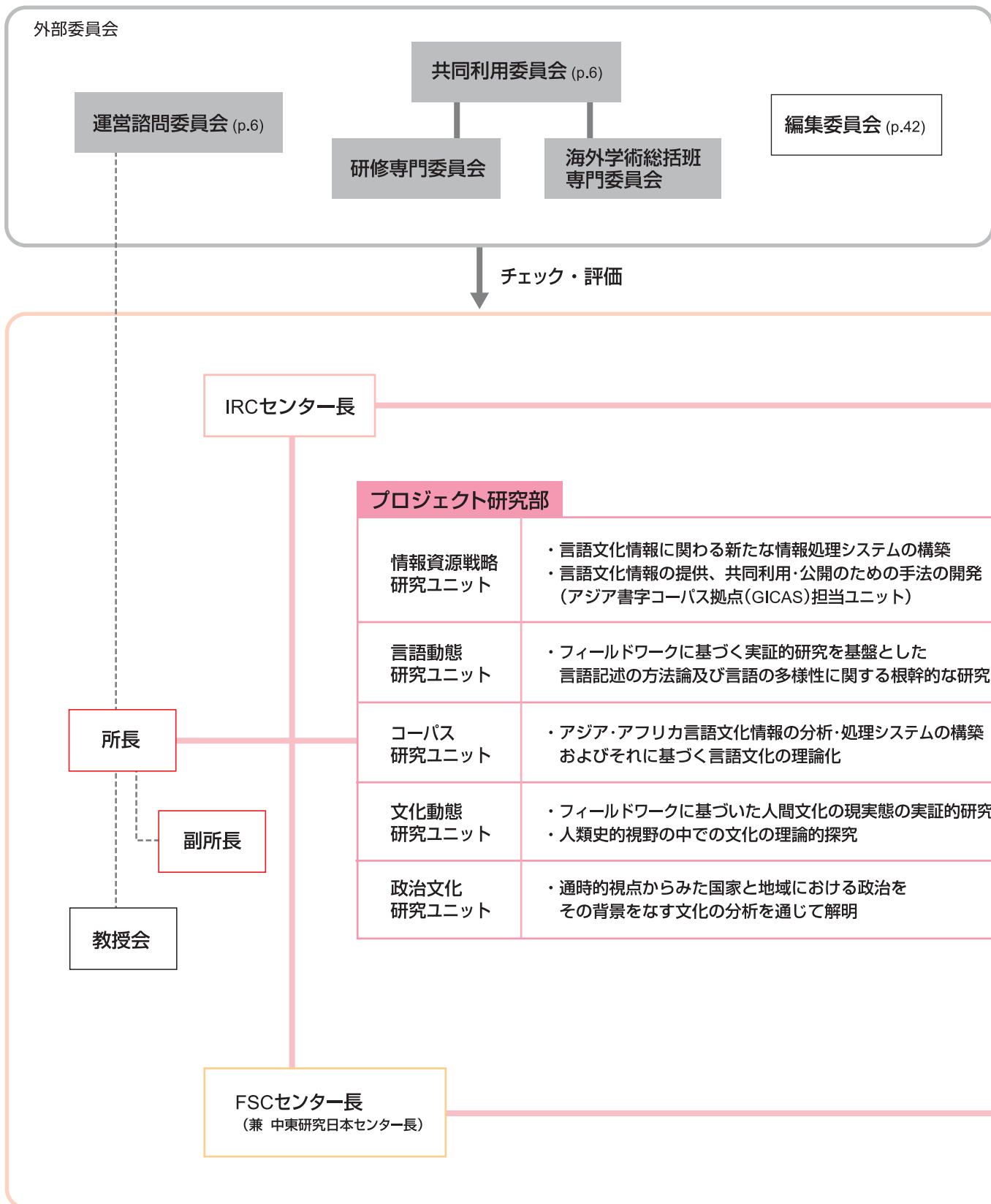
三つの研究軸を具体化させた中期目標・中期計画に基づいて、所員が活動の単位である「研究ユニット」に所属し、所内での共同研究を実施します。さらに、「研究ユニット」の活動にふさわしい「共同研究プロジェクト」を立ち上げることによって、国内外のそれぞれの研究領域において最先端の研究を行っている研究者を共同研究員として委嘱し、アジア・アフリカの言語・文化についての先導的な共同研究を推進します。

情報資源利用研究センターに所属する所員は、研究ユニットに関わる所員と同様に、共同研究を展開するとともに、所内外の研究における情報資源の蓄積・加工・公開と、それを利用した共同研究手法の開発も行います。

フィールドサイエンス研究企画センター所属の所員も、共同研究のほかに、現地研究を主体とするフィールドサイエンスの視点から、研究および研究企画を行っていきます。



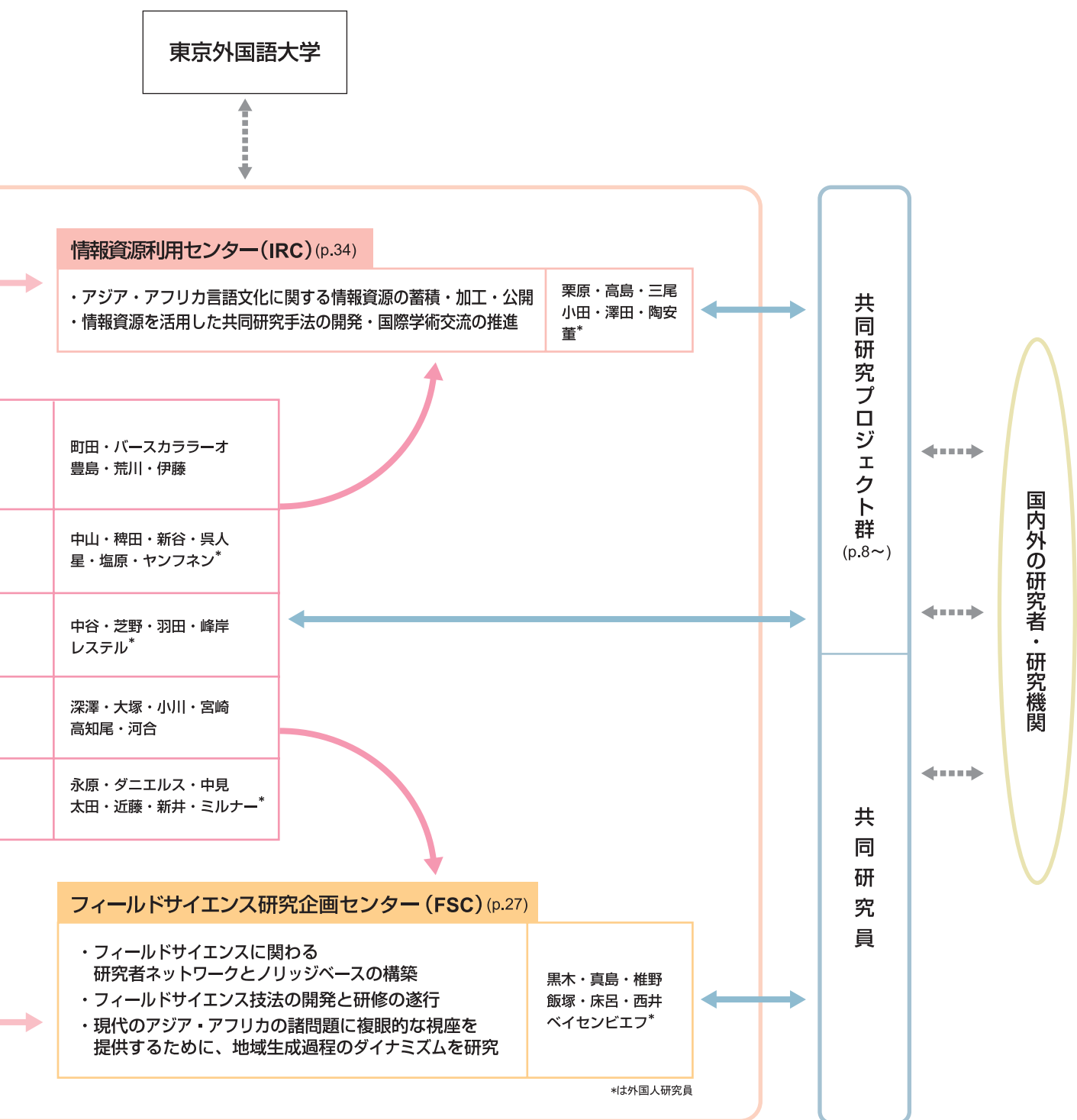
研究組織構成



■人員構成

区分	教授	准教授	助教	外国人研究員	非常勤研究員	共同研究員	フェロー	計
現員	18	18	3	5	8	396	9	457

・共同研究員は延数 ・フェローは日本学術振興会PDを含む(2007年6月1日現在)





研究および運営に関する評価体制

運営諮問委員会

研究所の日常の業務の運営は、教授・准教授で組織する教授会においておこなわれますが、共同利用研究所としての機能を適切に遂行するために、これとは別に運営諮問委員会が置かれ、研究所の運営の基本的・長期的方針などの重要事項について、所長の諮問に応えます。

所外(学外)の委員によって構成されます。2007年4月～2009年3月の運営諮問委員は次のとおりです。

家田 修(北海道大学スラブ研究センター教授)
 上野善道(東京大学大学院人文社会系研究科教授)
 倉沢愛子(慶応義塾大学経済学部教授)
 小泉潤二(大阪大学大学院人間科学研究科教授)
 竹中英俊(東京大学出版会編集局長)
 立本成文(総合地球環境学研究所長)
 田中二郎(京都大学名誉教授)
 長野泰彦(人間文化研究機構理事)
 原ひろ子(城西国際大学教授)
 水島 司(東京大学大学院人文社会系研究科教授)
 渡邊興亞(総合研究大学院大学監事)

共同利用委員会

研究所の共同利用に関して、研究者コミュニティによる透明性を持った運用体制を実現するため、所内外の委員からなる共同利用委員会が置かれています。これは、親委員会と、言語研修および海外学術総括班に関する事柄を扱う二つの専門委員会から成ります。

2007年4月～2008年3月の所外の共同利用委員は次のとおりです。

□共同利用委員会(親委員会)

岸本美緒(東京大学大学院人文社会系研究科教授)
 北川勝彦(関西大学経済学部教授)
 栗田博之(東京外国語大学外国語学部教授)
 倉沢愛子(慶応義塾大学経済学部教授)
 栗本英世(大阪大学大学院人間科学研究科教授)
 庄垣内正弘(京都産業大学文化学部教授)
 水島 司(東京大学大学院人文社会系研究科教授)
 林 徹(東京大学大学院人文社会系研究科教授)

□研修専門委員会

岸田文隆(大阪外国語大学外国語学部教授)
 藪 司郎(大阪外国語大学外国語学部教授)
 菅原 純(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所産学連携研究員)*
 鶴沢洋志(東京外国語大学外国語学部非常勤講師)*
 張 淑 儀(大阪外国語大学外国語学部講師)*
 (*の任期は2006年12月～2007年11月)

□海外学術総括班専門委員会

伊藤元己(東京大学大学院総合文化研究科教授)
 木村秀雄(東京大学大学院総合文化研究科教授)
 佐藤洋一郎(総合地球環境学研究所教授)
 徳留信寛(名古屋市立大学医学部教授)
 河野泰之(京都大学東南アジア研究所教授)
 梅崎昌裕(東京大学大学院医学系研究科准教授)
 安成哲三(名古屋大学地球水循環研究センター教授)
 本山秀明(国立極地研究所教授)

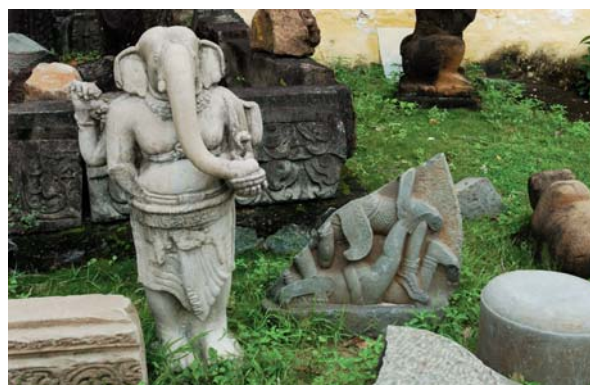
そのほかの研究班

(1) 全所評価

3年ないし4年に1度の頻度で、所外の研究者数名による所全体の研究活動、共同利用に関する評価を受けます。評価結果は公表されます。

(2) 教員研究活動評価

教授昇進後7年を経た時点で、個々の教員は研究業績評価を受けます。評価結果は公表されます。



ベトナム共和国ダナン、チャム彫刻博物館庭、彫刻や破片
 撮影者：澤田英夫

臨地研究に基づく研究拠点

フィールドワークにもとづく
ミクロとマクロの視点からの
実証的研究

- 共同研究プロジェクト……………08
 - 重点共同研究プロジェクト……………09
 - 一般共同研究プロジェクト……………10
 - 所外代表による共同研究プロジェクト……………21
- 研究者招へい ……………22
- シンポジウム・ワークショップ ……………23
- 外国研究機関との共同研究 ……………25
- フィールドサイエンス研究企画センター(FSC) … 27
- 中東イスラーム研究教育プロジェクト(MEIS) … 28
- 東南アジアのイスラーム
—トランスナショナルな連関と
地域固有性の動態(ISEA)…………… 29
- 中東研究日本センター(JaCMES) ……………29
- 研究未開発言語文化の調査事業 ……………30
- 競争的研究経費などによる研究 ……………31



共同研究プロジェクト

全国共同利用研究所である本研究所にとって、所員が中心となって所外の研究者と共同で推進する共同研究プロジェクトは、最も大切な研究業務のひとつです。

これまで数多くのプロジェクトが組織され、研究会が活発

に開催され、研究成果は400点を超す出版物をはじめとして様々な形で公開されています。

現在、次のとおり、25のプロジェクトが進行中です。

	プロジェクト名	年度	主査/ 所外代表	人数			主に関連する 研究ユニット /センター		
				所内	所外	合計			
重点	言語の構造的多様性と言語理論 —「語」の内部構造と統語機能を中心に	'05-'09(5y)	中山 俊秀	6	15	21	言語動態	p.9	
一般	遼・金・西夏に関する総合的研究—言語・歴史・宗教—	'07-'09(3y)	荒川 慎太郎	2	18	20	情報資源戦略	p.10	
	宣教に伴う言語学	'06-'08(3y)	豊島 正之	1	3	4	情報資源戦略	p.15	
	朝鮮語史研究	'05-'08(4y)	伊藤 智ゆき	2	9	11	情報資源戦略	p.14	
	言語接触と系統継承：大湖地域から南部アフリカにかけて話されるバンツー諸語と隣接言語の記述研究	'07-'09(3y)	稗田 乃	2	13	15	言語動態	p.10	
	総合人間学の構築	'07-'09(3y)	中谷 英明	7	29	36	コーパス	p.11	
	人類社会の進化史的基盤研究(1)	'05-'09(5y)	河合 香吏	4	14	18	文化動態	p.20	
	ムスリムの生活世界とその変容—フィールドの視点から*	'05-'09(5y)	大塚 和夫	8	34	42	文化動態	p.19	
	表象に関する総合的研究	'06-'08(3y)	高知尾 仁	4	7	11	文化動態	p.14	
	脱植民地化の双方向的歴史過程における「植民地責任」の研究	'07-'09(3y)	永原 陽子	2	27	29	政治文化	p.11	
	ペルシア語文化圏の歴史と社会*	'07-'09(3y)	近藤 信彰	4	27	31	政治文化	p.12	
	マレー世界における地方文化*	'05-'09(5y)	新井 和広	4	21	25	政治文化	p.18	
	東アジアの社会変容と国際環境	'06-'10(5y)	中見 立夫	3	32	35	政治文化	p.17	
	タイ文化圏における山地民の歴史的研究	'06-'10(5y)	クリスチャン・ダニエルス	3	10	13	政治文化	p.16	
	チベット=ビルマ系言語から見た文法現象の再構築 1: 格の体系とその周辺	'07-'08(2y)	澤田 英夫	3	11	14	IRC	p.12	
	ドイモイの歴史的考察	'04-'07(4y)	栗原 浩英	1	8	9	IRC	p.18	
	中国系移民の土着化/クレオール化/華人化についての人類学的研究	'03-'07(5y)	三尾 裕子	2	20	22	IRC	p.15	
	社会空間論の再検討—時間的視座から	'07-'09(3y)	西井 涼子	5	14	19	FSC	p.13	
	「シングル」と社会—人類学的研究	'07-'09(3y)	椎野 若菜	2	17	19	FSC	p.13	
	「もの」の人類学的研究—もの、身体、環境のダイナミクス	'07-'09(3y)	床呂 郁哉	4	18	22	FSC	p.14	
	マルセル・モース研究—社会・交換・組合	'06-'09(4y)	真島 一郎	3	4	7	FSC	p.17	
	東地中海地域における人間移動と「人間の安全保障」*	'04-'07(4y)	黒木 英充	4	23	27	FSC	p.19	
	所外代表	漢字字体規範史の研究	'07-'09(3y)	石塚 晴通	1	7	8	情報資源戦略	p.21
		語彙と文法	'07-'09(3y)	梶 茂樹	3	3	6	情報資源戦略	p.21
		インドネシアの国語政策と言語状況の変化	'06-'07(2y)	森山 幹弘	2	10	12	文化動態	p.21

*が付されたものは、「中東イスラーム研究教育プロジェクト」(p.28)とも関わりを持つプロジェクト。



共同研究プロジェクト

重点共同研究プロジェクト

言語の構造的多様性と言語理論
—「語」の内部構造と統語機能を中心に

語

「語」は人間言語に普遍的な重要な構造単位・ドメインであることは異論の余地のないところである。しかしながら、同時に、「語」は通言語的に、内的構造の上でも、統語的性質の上でも幅広い多様性を見せる。それゆえ、「語」というドメインが文法体系の中で担う機能的役割は言語によって大きく異なる。

そこで、本プロジェクトでは、形式的単位としての「語」について通言語的に適用しうる定義を確認し、そのうえで、「語」が通言語的に見せる構造的多様性(内的構造の組み立て方・複雑さについての多様性)および機能的多様性(統語法との間の役割分担のあり方の多様性)の幅を探ることを目的とする。

今年度は特に品詞分類の問題に焦点を当て、形態法と統語法の交点にある「語」の性質を通言語的に捉えてゆく。

[主 査]	中山 俊秀				
[所 員]	澤田 英夫	荒川慎太郎	呉人 徳司		
	塩原 朝子	星 泉			
[共同研究員]	阿部 優子	江畑 冬生	蝦名 大助		
	風間伸次郎	加藤 昌彦	加藤 重広		
	角谷 征昭	児島 康宏	沈 力		
	塚本 秀樹	永井 佳代	長崎 郁		
	永山ゆかり	山越 康裕	渡辺 己		



中国・新疆ウイグル自治区阿克陶県ウジュマ郷のコンサク・マザール(イスラーム聖者廟)
撮影者：菅原純



クワギョトル族の伝統的デザイン
(カナダ、ブリティッシュ・コロンビア州、クワドラ島にて) 撮影者：中山俊秀



共同研究プロジェクト

一般共同研究プロジェクト

遼・金・西夏に関する総合的研究 —言語・歴史・宗教—

10-12世紀、中国北部・西北部に成立した遼・金・西夏は、東洋史上でも特異な位置を占める。昨今は従来の漢文史料資料による研究のみならず、各国語独自の文字解読の進展、新出土資料の考古学的知見などにより、それらの研究は新たな局面を迎えつつある。

遼・金・西夏の研究は、それぞれの国家の独自性、各国語文字資料の特殊性などから、これまで個別に行なわれることが多かった。しかし近年では諸分野・諸地域にまたがった研究課題も増加してきた。従来の漢人世界中心の枠組みを見直すとともに、当時の北方地域を多角的・統合的に検討しなければならない。

本プロジェクトは、各国の言語・歴史・宗教という、広い領域にわたる研究者をメンバーとする。共同研究員が互いに情報を共有し、意見を交換して、より大きな視野でそれぞれの研究課題を捉えることを目的とする。また、「遼金西夏研究会 (<http://homepage3.nifty.com/liaojinxixia/>)」とも連携して研究発表を行い、成果を一般に公開する。

[主 査]	荒川慎太郎			
[所 員]	中見 立夫			
[共同研究員]	井黒 忍	白杵 勲	大島 勝俊	
	小野 裕子	佐藤 貴保	佐藤 友則	
	澤本 光弘	白石 典之	高井 康行	
	高橋 学而	武内 康則	武田 和哉	
	藤原 崇人	船田 善之	松川 節	
	向本 健	毛利 英介	渡辺 健哉	



2006年9月 中国内蒙古自治区エチナ旗 西夏～元代の遺跡「カラホト」城内にて。半ば砂に埋もれた、北区画にある寺廟跡。撮影者：荒川慎太郎

言語接触と系統継承：大湖地域から南部アフリカにかけて話されるバンツ語と隣接言語の記述研究

大湖地域から南部アフリカにかけて話されているバンツ語とその隣接諸言語を、既に現地調査を行った研究者を中心に、それらの言語の記述的研究の諸問題について明らかにするとともに、これまで各研究者が個別に得た成果を共同研究において総合し、討議することにより、この地域に特徴的な言語現象(音韻論的、形態論的、統語論的特徴)を探り出し、それらの言語現象をもたらした原因を探る。

この地域は、古代より人、物、文化の移動する重要な経路であった。様々な言語を話す人々がこの経路を通った。その結果、一つの言語的に特異な地域を形成した。言語接触と系統継承を解きほぐすことにより、この地域の特異な言語現象の実態を明らかにする。

[主 査]	稗田 乃			
[所 員]	椎野 若菜			
[共同研究員]	安部 麻矢	阿部 優子	加賀谷良平	
	梶 茂樹	角谷 征昭	神谷 俊郎	
	品川 大輔	高村美也子	中川 裕	
	宮崎久美子	湯川 恭敏	米田 信子	
	若狭 基道			



タンザニア、マンゴラ村では、ダトーガ語(ナイル・サハラ)、イラク語(アフリイジアン)、ハツツァ語(コイサン)、スワヒリ語などバンツ語(ニジェール・コンゴ)というアフリカ4言語ファミラム全ての言語が話されている。多言語使用は明らかだが、言語接触はどうなるか。撮影者：稗田乃

総合人間学の構築

近年の科学技術の飛躍的進展は、地球という自然ばかりでなく、人のこころという自然をも改変しようとするに至っている。これに伴って生起している深刻な国際的、社会的、個人的諸問題は人文・社会科学に迅速な対応を迫るものである。本プロジェクトは、人文・社会科学を社会と科学・技術に対していっそう開かれたものとすることによってその方法論を刷新し、すべての人々にとってのよりよい社会のあり方を考察する基盤科学として確立することに貢献しようとするものである。この目標に向かって本プロジェクトは新学術領域「総合人間学」を構想する。

諸領域の研究者の直接対話の継続的な場としての総合人間学は、(1)世界諸地域の諸状況を俯瞰し、(2)先端科学技術の最新成果を吟味しつつ、(3)人間の生物的特性および諸文明の精神伝統の正確な把握に基づいて、(4)よりよい未来世界のあり方を考察する。こうして個別学術領域の限界を超え、世界の急激な変化にも即応する、柔軟でかつ体系的な総合的基礎研究の恒久的な場の構築に努める。

[主査]	中谷 英明				
[所員]	峰岸 真琴	荒川慎太郎	芝野 耕司		
	床呂 郁哉	真島 一郎	宮崎 恒二		
[共同研究員]	池本 幸生	石堂 常世	市川 裕		
	井原 康夫	内堀 基光	内山 勝利		
	大津 透	丘山 新	小川 正廣		
	柿木 隆介	笠井 清登	亀山 郁夫		
	河井 徳治	黒田 彰	後藤 敏文		
	新宮 一成	杉下 守弘	杉本 良男		
	中島 隆博	中島 秀人	中田 力		
	長野 泰彦	納富 信留	日高 敏隆		
	寶珠山 稔	松井 健	松尾 剛次		
	丸山 徹	水野 善文			



第2回総合人間学国際シンポジウム「諸文明から未来世界を構想する」(平成17年10月22・23日新宿サンスカイルーム)左から石井、宮崎、内堀、Galey、Rischar、Aymard、日高、金、中谷

脱植民地化の双方向的歴史過程における「植民地責任」の研究

近年、世界の各地で、植民地支配の被害に対する謝罪や補償を求める動きが顕在化している。それらは、植民地支配を受けた人々の歴史意識の変化を表わしており、政治的独立を経た後の、「脱植民地化」の新たな段階を示すものである。それらの動きはしばしば、狭義の植民地時代のみでなく、奴隷貿易・奴隷制の時代までも視野に入れており、また、戦争犯罪、ジェノサイド、先住民問題、マイノリティ問題、ジェノサイド等、他の大規模人権犯罪の被害者の権利回復をめぐる動きとも連動している。

本研究では、そのような歴史意識の変化の背後にある旧植民地・宗主国の関係をとらえるために「植民地責任」の概念を用い、アフリカをはじめ、アジア、中南米、太平洋地域など世界のさまざまな旧植民地地域の人々の歴史意識の変容を比較史的にとらえることで、脱植民地化の歴史過程の研究に新たな地平を切り拓くことを目指している。

[主査]	永原 陽子		
[所員]	栗原 浩英		
[共同研究員]	浅田 進史	阿部 小涼	網中 昭世
	粟屋 利江	飯島みどり	今泉裕美子
	大井 知範	大峰 真理	小山田紀子
	尾立 要子	後藤 春美	小林 元裕
	柴田 暖子	清水 正義	鈴木 茂
	高林 敏之	津田 みわ	中野 聡
	浜 忠雄	平野千果子	
	船田クラークセンさやか		前川 一郎
	真城 百華	溝辺 泰雄	吉澤 文寿
	吉田 信	渡辺 司	



南アフリカ共和国ケープタウン沖、ロベン島(ネルソン・マンデラの収容されていた監獄島)のイスラーム聖者廟 撮影者：永原陽子



共同研究プロジェクト

一般共同研究プロジェクト

ペルシア語文化圏の歴史と社会

「ペルシア語文化圏」はおおよそ11世紀から19世紀のいずれかの時期にペルシア語を文学語、行政語として用い、ペルシア語文化の影響を強く受けたイラン、アフガニスタン、インド、マウラアンナフル、アナトリアを中心とした地域を指す。この概念は日本では近藤(2000)を契機に用いられるようになり、2004-2006年度の北海道大学スラブ研究センターCOEにおいても共同研究が行われ、AA研でもシンポジウムが開催され、言語的に重層的な構造を持ちつつもペルシア語を軸に行われた文化交流の諸相がかなりの程度明らかとなった。しかし、この概念については検討すべき点が依然残っている。

本プロジェクトではこれを発展的に継承し、より幅広い分野の専門家を結集して研究会を開催し、「ペルシア語文化圏」概念についてその有効性と限界を、実証研究に基づいて検討する。また、先行する科研プロジェクトと連携して活動を行う。

[主査]	近藤 信彰
[所員]	羽田 亨一 太田 信宏 ティムール・ベイセンビエフ
[共同研究員]	赤坂 恒明 秋葉 淳 阿部 克彦 磯貝 健一 大河原知樹 大稔 哲也 小野 浩 川口 琢司 川本 正知 後藤 敦子 小牧 昌平 清水 和裕 菅原 陸 菅原 純 高松 洋一 中西 竜也 春田 晴郎 深見奈緒子 藤井 守男 前田 弘毅 真下 裕之 間野 英二 守川 知子 森本 一夫 矢島 洋一 山口 昭彦 渡部 良子

チベット=ビルマ系言語から見た文法現象の再構築1: 格の体系とその周辺

文法現象が「なま」のものでなく、分析することによって立ち現れて来るものならば、観察する視野の拡大と深化によって文法現象は「再構築」されるものであり、またされるべきものである。本プロジェクトは、そういう意味での文法現象の再構築を、この十数年で個別言語の記述の蓄積にめざましい進展をみたチベット=ビルマ系諸言語の研究者が、各自の掘り起こしてきた言語事実と、それらを観察し記述する視点の広がりと深さを共有することによって行なおうとするものである。対象とする文法現象は、文とりわけ単文の構造の根幹にかかわる格の体系と、それに関連する諸現象である。

[主査]	澤田 英夫
[所員]	星 泉 荒川慎太郎
[共同研究員]	池田 巧 海老原志穂 岡野 賢二 加藤 昌彦 桐生 和幸 白井 聡子 鈴木 博之 高橋 慶治 西田 文信 林 範彦 本田伊早夫



カチン諸民族(いずれもチベット=ビルマ系に属する)の祭の中でもっとも有名なマナウ祭の踊り。
(2007年1月10日、ミャンマー連邦カチン州ミッチーナ、シャタブルー地区、マナウ祭場にて) 撮影者: 澤田英夫

社会空間論の再検討—時間的視座から

グローバル化の進行のなかで、人類学は村落などの共同体を、境界づけられた小規模社会として閉じたものと仮定することがますます困難になっている。人類学の従来の対象そのものが変化するにつれて、人類学においても「境界づけられたフィールド」から「移行するロケーション」へとその対象をシフトさせる方向が見られる。これは、フィールドワーク実践をフィールドワークという方法論は残しつつ、その主要な学問的関心を、フィールドワークを行っている人類学者自身の行為や関係性に集中させていく傾向が強まっているということである。しかし、本プロジェクトの「社会空間」論は、このような近年の自己に収斂していく「ポストモダン人類学」とは袂を分かたず、「社会空間」とは、具体的な人々の生と社会関係が現実の行為によって築きあげられていく生きる現場そのものをさす。特に、グローバル化によって移動やコミュニケーション手段が飛躍的に拡大しても、心、身体、モノ、活動が日常の実践として組織されていく場所が存在することに注目する。その一方で「社会空間」論は、従来の構造やシステムとして人類学者や社会学者が生きた社会関係を還元した抽象化モデルによって把握しようとする試みとはまた異なる。あくまで日常から離れた超越的モデルに抗して、人々の日常の実践の場や過程を経験のなかから生の現場を捉えていく試みである。本プロジェクトは「社会空間」論に時間的視点を導入することで、その理論的射程をさらに深化/拡大させることを目指す。

[主査]	西井 涼子			
[所員]	河合 香史	椎野 若菜	床呂 郁哉	
	三尾 裕子			
[共同研究員]	石井 美保	今村 真介	岩谷 彩子	
	春日 直樹	古谷 伸子	佐藤 知久	
	高木光太郎	田中 雅一	田邊 繁治	
	土佐 桂子	名和 克郎	檜垣 立哉	
	平井京之介	箭内 匡		

「シングル」と社会—人類学的研究

本プロジェクトは、社会におけるシングルとしての個人に注目し、その生き方の実態を通文化的に比較研究するものである。シングルと社会のあり方、とくにシングルの生きる戦術を人類学的に明らかにするものである。こうした作業により、固定されがちなシングルに対する現代的な社会理念を文化人類学の立場から検討することをめざす。

現代社会における個人の生き方は多様化してきている。たとえば非婚者、未婚の母、寡婦／寡夫、出稼ぎ者とそのパートナー、老齡のシングル、といった社会的背景や条件をもつ人びとがいる。社会は、こうした単身者をどのように位置づけ、対応してきたのだろうか。ジェンダーや社会的地位による違いはあるのだろうか。そうした社会的理念は、どのように変化しているのだろうか。

まず、これまでの個人についての哲学的研究や社会学的研究、社会史研究における研究成果を概観し、その歴史の変遷をとらえていく。そのうえで、宗教、社会組織、歴史的背景、地域文化的背景の異なる諸社会におけるシングルの多様な生き方の実態と各社会に通底する社会的理念とのほごまを、現代社会批判という意図を含み文化人類学的な視点を中心にさぐるものである。

[主査]	椎野 若菜			
[所員]	西井 涼子			
[共同研究員]	石井 美保	上杉 妙子	植村 清加	
	宇田川妙子	岡田 浩樹	小田 亮	
	國弘 暁子	小馬 徹	高橋絵里香	
	田所 聖志	田中 雅一	棚橋 訓	
	花淵 馨也	馬場 淳	細谷 幸子	
	森 明子	八木 祐子		



キオスクを営むルオの寡婦とその友人 撮影者：椎野若菜



共同研究プロジェクト

一般共同研究プロジェクト

「もの」の人類学的研究 —もの、身体、環境のダイナミクス

本プロジェクトは人間世界を取り巻く多様な「もの」をテーマとして人類学的視点から研究を行うものである。特に本プロジェクトではアジアやアフリカをはじめ各地で豊富な調査経験を持つ複数の人類学や関連分野の研究者の参加と協力によって、「もの」と人間社会との複雑で多様な関係について、環境や身体というキーワードを参照しながら学際的な共同研究として実施するものである。ここで「環境」に加えて「身体」というキーワードが出てくる理由は、「もの」の生産や加工(あるいは利用)などの現場において、身体化された暗黙の実践的知識や各種の身体技能などが大きな役割を果たすと指摘されることが少なくないからである。このため本プロジェクトでは通常のプロジェクト研究会の開催に併せて、国内各地における各種の「もの」の生産や利用の現場を見学するエクスカージョンを同時に実施することで、「もの」に関わる身体的実践のあり方を実地に検証することも大きな特徴としている。

[主 査]	床呂 郁哉			
[所 員]	西井 涼子	河合 香史	椎野 若菜	
[共同研究員]	今堀 恵美	岩谷 彩子	印東 道子	
	内堀 基光	春日 直樹	金子 守恵	
	川田 順造	窪田 幸子	黒田 末寿	
	五島 朋子	湖中 真哉	菅原 和孝	
	砂川 和範	関本 照夫	田中 雅一	
	土佐 桂子	山越 言	山本 真鳥	



仕立て屋をして生計をたてる寡婦 撮影者：椎野若菜

表象に関する総合的研究

このプロジェクトは、まえのプロジェクト「旅と表象の比較研究」を継承しつつ、「人間にとって表象とは何か」という問いに対し、問題提起を行うことを目的とする。主に以下の三点について研究を行う。

- (1) 「表象としてのX」・・・Xには、他者、土地、場所、宗教(神、死者等)、自然(風景、動植物等)、政治、などが考えられ、それらに関する具体的な研究。
- (2) 表象に関する理論的、精神史的研究。
- (3) 表象媒体に関する認知科学的研究。

[主 査]	高知尾 仁			
[所 員]	深澤 秀夫	小田 淳一	真島 一郎	
[共同研究員]	浅井 雅志	荒木 正純	今村 真介	
	彌永 信美	齋藤 晃	田中 純男	
	原 毅彦			

朝鮮語史研究

朝鮮語は朝鮮半島で話されている言語であり、日本語同様、その起源や系統関係が不明な言語である。また朝鮮語は15世紀半ばにハングルが創製されるまで固有の文字をもっていなかったため、朝鮮語史の研究はより困難なものになっている。

それに加え、従来の朝鮮語の研究はそれぞれの研究者が特定の時代の朝鮮語について研究することが主で、朝鮮語史を研究する者同士が相互に協力することによって朝鮮語史全体の流れを追求するということがなかった。

そこで本プロジェクトでは、古代～近代に至る朝鮮語の研究者が集まり、各時代の朝鮮語について、音韻・文法・書誌学等さまざまな側面からの分析を試みる。

2007年度は、年2回の研究会を企画する(1回に1～2名程度の研究発表を予定)。

[主 査]	伊藤智ゆき			
[所 員]	荒川慎太郎			
[共同研究員]	伊藤 英人	門脇 誠一	岸田 文隆	
	趙 義成	陳 南澤	辻 星児	
	南 潤珍	福井 玲	藤本 幸夫	

宣教に伴う言語学

「宣教に伴う言語学」とは、所謂「大航海時代」のキリスト教布教に伴う言語研究活動を指し、英語では既にMissionary Linguisticsの語で定着している。

主たる資料となる文献は、16～17世紀のスペイン・ポルトガルによる宣教活動に伴って生産された文法書、語彙集、辞書・字書、教義書、修徳書、その他の布教関連書籍、及び関連歴史文書(規約、年報、報告、書簡など)である。

プロジェクト研究の目的は、次の通り。

(1) 従来の日本の「キリシタン文献研究」の成果を以て、国際的な「宣教に伴う言語学」の共同研究活動の水準の向上に寄与する。

(2) 対訳辞書類に重点を置き、15～17世紀のスペイン・ポルトガルに於ける辞書編纂史、同時代の日本に於ける辞書・字書編纂史を基礎とし、日本語以外の他の言語(例:コンカン語)の対訳辞書も素材として、辞書編纂史・語彙研究史の論点を整理する。

(3) 宣教活動に伴って生産された各国語の文法書類の文法カテゴリーの仕分け・対照等の対照研究、関連歴史文書類の書誌学的研究など、従来の日本の「キリシタン文献研究」の延長上にありながらも殆ど手つかずの状態にある領域に踏み出す。

[主 査] 豊島 正之

[共同研究員] 岸本 恵美 白井 純 丸山 徹



ベトナム中部ホイアン、華人の家屋に貼られた旧正月祝いの赤紙。
撮影者：澤田英夫

中国系移民の土着化／クレオール化／華人化についての人類学的研究

本研究では、海外中国人(本研究では、地政学的な「中国」の外に移住した中国系の人々を指す用語として用いる)を対象に、海外中国人を同質的、単一的に表象する従来の人文・社会科学の諸研究に共通した分析視点を批判的に再検討し、新たな海外中国人像(華人／チャイニーズ・クレオール等)や「民族」概念を再構築することを目的とする。具体的には、以下の諸点を明らかにする。

(1) 従来の諸研究において等閑視されてきた、周縁的存在となり土着化が進んだ中国系住民および多民族文化との混淆としてのチャイニーズ・クレオール等を中心とする多様な海外中国人に注目し、それらの人々が構成する様々な社会文化の実態、そしてそれらの人々のアイデンティティ形成過程を分析する。

(2) ホスト社会と中国系住民との相互作用、国民国家化の過程、ローカル／グローバルの関係性から生じる、中国系住民が関わる民族カテゴリーとそのエスニック・ポリティックスの実態を把握する。歴史過程の中で中国系住民の土着化、クレオール化、或いは「中国人化(華人化)」という異なるベクトルが、必ずしも時系列的にはではなく、時に同時並行的に進んで来たことや、土着化やクレオール化の道を歩んだ海外中国人のある一部分が、特定の政治的、経済的な要因によって中国人の範疇から捨象されたことを明らかにする。

(3) 土着化あるいはクレオール化した海外中国人という周縁性の排除によって、本質主義的な「華僑」「華人」像が想像されるプロセスを明らかにする。なお、本プロジェクトは、2004年度より開始された科研費基盤A「東南アジアにおける中国系住民の土着化・クレオール化についての人類学的研究」と連携し、現地調査を踏まえた研究を行っている。

[主 査] 三尾 裕子

[所 員] 西井 涼子

[共同研究員] 赤嶺 淳 板垣 明美 市川 哲

甲斐 勝二 紀 宝坤 木村 自

桑山 敬己 貞好 康志 末成 道男

菅谷 成子 芹澤 知広 田村 和彦

田村 克己 中西 裕二 信田 敏宏

舛谷 鋭 宮下 克也 宮原 暁

山本須美子 王 維



共同研究プロジェクト

一般共同研究プロジェクト

タイ文化圏における山地民の歴史的研究

中国西南部から大陸東南アジア北部に跨がるタイ文化圏の歴史においては、タイ系民族の盆地政権がその周辺の山岳地帯に居住する山地民を緩やかに「統治」した。19世紀以降、タイ文化圏は中国、ミャンマー（ビルマ）、タイ、ラオス、ヴェトナム及びインドの6カ国に組み込まれて、盆地政権は消滅した。盆地政権の領民はこの六つの近代領域国家に同化を強要されたものの、タイ文化圏はなお存続している。これまで研究者は、盆地政権中心にこの地域全体の歴史を再構築してきたが、山地民が盆地政権の存続を揺るがす存在であるにもかかわらず、山地民の歴史的役割を重要視してこなかった。本プロジェクトの目的は山地民の歴史的役割を明らかにして、その役割を総合的に概念化することによってタイ文化圏の歴史的形成を再解釈することである。



センジュムのわんぱく坊主 ミャンマー（ビルマ）シャン州、チェントウン、センジュム村にて。撮影者：唐立

このような再解釈によって、これまでタイ系民族側から叙述されたタイ文化圏の歴史がもっと公平に見られるようになると期待できる。これまで山地民が果たした歴史的役割を重視しなかった理由としては、以下の2点が挙げられる。第一に歴史家は、この6カ国における近代国家の建国に貢献した文化や民族が果たした役割を強調する視点から歴史を再構築してきたが、山地民は貢献度が少ないため等閑視されてきた。第二に、研究者は各民族集団の固有な文化と歴史の解明を目的に、個別的に研究してきたため、山地民が共通に経験してきた歴史という視点が見落とされてしまった。夥しい数の民族集団が居住する地方はそれぞれ異なるが、その歴史体験の共通性を明らかにする視点を採用する手法によって、タイ文化圏の歴史に対する統一的理解を深化させることを、本プロジェクトは目指している。

山地民の歴史研究には史料的な制約があり、先行研究も乏しいため、プロジェクトの運営上以下のような措置をとる。山地民の多くは自己の文字を有しないので、盆地のタイ系民族や、中国とビルマ王朝の史料、及び西洋人など、外部の人間の手による資料に依存せざるを得ない。そのため歴史学者以外にも言語学や文化人類学などの専門家の参加によって学際的なアプローチを採用する。2年目に当たる2007年度においては、2006年度3回目の研究会で作り上げた最終的な研究枠組みに基づいて、1年間の研究会活動を実行している。なお、本プロジェクトは、2005年度から開始された科研費基盤研究B「言語・文化調査に基づくパラウン史の解明」と連携し、現地調査を踏まえた事例研究の分析も行なう。

[主査]	クリスチャン・ダニエルス
[所員]	新谷 忠彦 陶安あんど
[共同研究員]	飯島 明子 池田 一人 櫻永真佐夫
	片岡 樹 加藤 高志 小柳 美樹
	武内 房司 長谷千代子 村上 忠良
	山田 敦士



センジュムのわんぱく坊主 ミャンマー（ビルマ）シャン州、チェントウン、センジュム村にて。撮影者：唐立

東アジアの社会変容と国際環境

近年における国際情勢の変化と学術交流の発展によって、われわれ歴史学研究者は東アジア各地域の文書館・図書館などに所蔵される一次資料に対し、以前とは比べられないほど容易に接近できるようになった。さらに現地学界でも、あらたな歴史評価・研究動向がおり、われわれの研究への刺激となっている。ただ対象とすべき史料の量があまりに膨大で、その実態を体系的に把握してはいない。また、個別の研究が深化するとともに、より大きな視野のもとに、問題をとらえなおし、分析枠組みを再検討することも必要である。さらに海外学界との共同研究、史料調査も、双方にとって、より具体的で実りの多い形で推進しなければならない。

本プロジェクトでは、このような研究状況を念頭におきながら、18世紀から20世紀初頭の東アジア世界各地における社会の変容が、外部世界とどのように有機的に関連していたかという問題を中心にすえ、文書史料によりそれがどこまであきらかにできるか検討する。東アジアに関する史料と研究情報の開かれたフォーラムをめざしている。毎回テーマをかえながら、海外からのゲスト・スピーカーもまじえ、シンポジウム形式で研究会を開催し、また『東アジア史資料叢刊』などの出版物も刊行している。

[主査]	中見 立夫		
[所員]	クリスチャン・ダニエルス	栗原 浩英	
[共同研究員]	赤嶺 守	石井 明	石川 禎浩
	井上 治	井村 哲郎	江夏 由樹
	岡 洋樹	岡本 隆司	笠原十九司
	加藤 直人	川島 真	貴志 俊彦
	岸本 美緒	楠木 賢道	佐々木 揚
	新免 康	菅原 純	寺山 恭輔
	西村 成雄	萩原 守	浜下 武志
	原 暉之	平野 聡	ブレンサイン
	細谷 良夫	松川 節	松重 充浩
	毛里 和子	森川 哲雄	柳澤 明
	吉澤誠一郎	吉田 豊子	

マルセル・モース研究—社会・交換・組合

本プロジェクトでは、フランス社会学・民族学の基礎をきずいたマルセル・モースの業績を、書評・時事論説・講演録・未定稿なども含めた、そのほぼ全作品について横断的に吟味しながら、個人と国家のはざまに位置するものとして構想された「社会 *société*」とは何であり、また何でなかったのかを、今日の視点から再検討する作業がめざされている。

とりわけ、学問形成期のサンスクリット研究から20世紀転換期の供儀論、呪術論をへて、やがて『贈与論』(1925年)で表明されることになる「交換」の民族学的モチーフが、同じ両大戦間期(=第三インターナショナル/コミンテルン期)に発表された一連の協同組合論、ポリシェヴィズム論、暴力論、ナシオン論などと、また他方における個体論、身体論、人格論、技術論などと、「社会」学的次元でいかなる理論的連関により繋がっていたかが、共同研究の中心的論点となる。

『民族誌学の手引き』の著者は、法・道徳・貨幣・革命のかなたに、どのような凝集力をそなえた「社会」の姿を夢みていたのか。それはまた、今日のアジア・アフリカ諸国における「社会」の動態と、なんらかの接点をもちうる夢だったのか。

[主査]	真島 一郎
[所員]	深澤 秀夫 高島 淳
[共同研究員]	泉 克典 小杉麻李亜 関 一敏 渡辺 公三



モースの『リュマニテ』誌記者証明書(1905年)



共同研究プロジェクト

一般共同研究プロジェクト

ドイモイの歴史的考察

ドイモイ(刷新)政策がベトナム共産党の公式な政策として提起されてから、すでに18年が経過しようとしている。この間に、ドイモイはベトナムの党・国家の諸政策(政治・経済・軍事・外交・文化等)、社会、国民の価値観のあり方に大きな変化をもたらした。同時にその問題点も顕在化しつつあり、今やドイモイを総括すべき時期に入っているといつてよい。

しかし、この間にドイモイを対象とした研究はどれほど進展したといえるだろうか。国内外のドイモイ研究に目を向けると、分野ごと(政治、経済、外交、軍事、法律など)のアプローチや各種調査の類が多く、ドイモイの全体像が見えないものが多い。とりわけ、ドイモイ研究の展開に際して不可避であると思われる次の2点に関して、議論が深化されないままの状態を続けておくことは許されないであろう。それは、第一に、ドイモイの起源に関わるテーマであり、その中には、(1)ドイモイの開始に際しての南ベトナムの役割、(2)レ・ズアン時代末期(1979年-85年)の一連の改革政策(通貨改革、農業における生産物請負制など)とドイモイの関連性をどのように評価するかという問題が含まれる。第二には、一党独裁下における市場経済導入、経済発展優先志向などの点で、ドイモイと共通すると思われる改革政策が他国にも存在する(した)事実に着目して、ドイモイを一国の枠組から脱却して考察する必要があるのではないかということである。具体的な事例としては、(1)ドイモイの始動段階におけるソ連のペレストロイカとの関連性、(2)中国の改革・開放政策とドイモイの関連、(3)開発独裁体制との類似性などがあげられる。

本プロジェクトは、以上のような問題認識に立って、大きく二つのアプローチに依拠しながら、ドイモイ研究の新境地開拓をめざそうとするものである。第一には、ドイモイにおけるベトナム固有の要因を探究するために歴史的なアプローチを援用していく。具体的なテーマとしては、(1)ドイモイの起源に関わる諸問題(南ベトナムの存在とドイモイ、レ・ズアン時代末期の改革政策の位置付け、北部におけるドイモイに先行する諸現象、ソ連におけるペレストロイカの影響)(2)ドイモイ以前の旧体制=集団主義体制の構造を明らかにするとともに記録する、(3)ドイモイにおける根幹部分と付随的な部分は何か、(4)ドイモイにおける社会主義的性格はどこに残存しているのか、があげられる。第二には、体制比較を通じて、ドイモイのもつ普遍的な側面を解明することである。比較の対象としては、中国の改革・開放政策、ラオスの新思考政策、移行経済諸国(旧ソ連、東欧など)、インドネ

シアの開発独裁体制が想定されるが、比較するための基礎を厳密に定義するとともに、体制間の接触、相互作用にも注意していく。

[主査]	栗原 浩英			
[共同研究員]	石井 明	今村 宣勝	加藤 弘之	
	白石 昌也	鈴木 基義	竹内 郁雄	
	根本 敬	古田 元夫		

マレー世界における地方文化

国家としてのインドネシア、マレーシアを包含する広義の「マレー世界」の多様な地方文化に関する人類学的な研究はこれまでも行われてきた。しかし、多くの地方に残る現地語文書に関しては、人類学、歴史学いずれの分野からも着目されていない。これらの文書の中には、各地方の文化の形成や変遷に関する興味深い資料が含まれており、あらたな資料の宝庫である。本計画は、これらの文書を中心に、地方文化の形成過程に関する研究を行うものである。本計画はいくつかの関連事業を有する。2007年度においては、東南アジア・イスラーム地域における人間集団分類概念に関する国際シンポジウムを他機関と共同して開催する。

[主査]	新井 和広			
[所員]	塩原 朝子	宮崎 恒二	床呂 郁哉	
[共同研究員]	青山 亨	オマール・ファルーク		
	奥島 美夏	川島 緑	久志本裕子	
	国谷 徹	黒田 景子	小林 寧子	
	塩谷 もも	篠崎 香織	菅原 由美	
	坪井 祐司	東長 靖	富田 暁	
	中田 考	西 芳美	西尾 寛治	
	服部 美奈	水上 浩	山口 裕子	
	山本 博之			

東地中海地域における人間移動と「人間の安全保障」

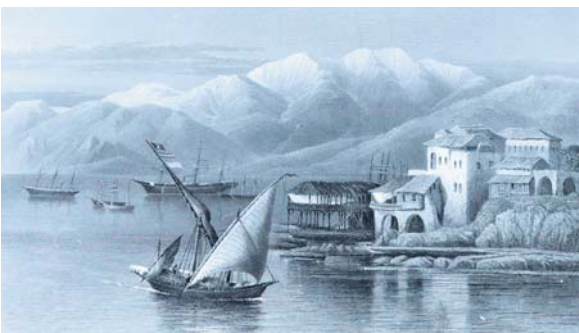
東地中海地域は、商業・巡礼・移民など、古代より活発な人間移動と諸集団の交流の場を提供してきた。人類史上、グローバリゼーションのプロトタイプを最初に経験した地域といえよう。日常的異文化接触のなかで他者を受容し安全を保障するシステムについては、確固たる伝統の存在が認められる。

一方、現在の東地中海地域にはパレスチナ問題やキプロス紛争をはじめ、人間移動を伴う深刻な民族・宗派問題が多数存在する。これらの問題は、ゲーム論的な国際政治の枠組のなかで分析されることが多く、現地の文化的・社会的文脈のなかに位置付ける作業は軽視されてきた。

本研究プロジェクトは、人間の空間的移動と社会移動を総合した「人間移動 (Human Mobility)」を鍵概念として援用し、民族的・宗派的に多様な構成をもつ東地中海地域の諸社会が、現在深刻な内部対立を孕む危機的状况に至った過程を検証するとともに、安全保障の規範や共存の論理を、人間移動の過程とそれを取り巻く環境のなかに発見し、「人間の安全保障」の議論に新たな視角を提供することを目指す。

なお、本研究プロジェクトは、科研費による「新たな東地中海地域像の構築」プロジェクトと連動して進められている。

[主査]	黒木 英充			
[所員]	飯塚 正人	小田 淳一	床呂 郁哉	
[共同研究員]	白杵 陽	小副川 琢	粕谷 元	
	北澤 義之	栗田 禎子	佐藤 幸男	
	佐原 徹哉	澤江 史子	末近 浩太	
	土佐 弘之	長沢 栄治	中村 妙子	
	錦田 愛子	間 寧	堀井 優	
	前田 弘毅	松井 真子	黛 秋津	
	村田奈々子	森 晋太郎	家島 彦一	
	屋山久美子	吉村 貴之		



19世紀後半のペイルート。地中海と冠雪したレバノン山脈。

ムスリムの生活世界とその変容 —フィールドの視点から

本プロジェクトは、世界総人口の2割ほどを占めるとされる世界各地のムスリム(イスラームの信者)の生活世界の実態を民族誌的アプローチから探るとともに、比較を通してそれらに見られる共通性・普遍性と地域・時代ごとの特殊性の双方を明らかにすることを主な目的とする。対象とする地域は、これまでのイスラーム研究において中心とみなされてきた中東のみならず、サハラ以南アフリカ、南アジア、中央アジア、東南アジア、東アジアを含み、さらに欧米などのムスリム・マイノリティ社会も視野に入れる。

主要な研究テーマとしては、衣食住をはじめとする、ムスリムの日常生活に見られる些細な社会的・文化的現象の検討を出発点とし、それから国家や国際レベルにおける政治・経済的大状況を考察するというボトムアップ的視点、すなわちフィールドの現実を重視する社会・文化人類学や地域研究的な方法を重視する。それと同時に、イスラーム学の専門家にも参加してもらい、ローカルな場における民族誌的事実とより普遍的なイスラームの法学・神学的解釈との異同も検討する。また、今日のムスリム社会が、一方ではイスラーム復興のさまざまな兆候を見せているとともに、他方では近代化・世俗化・グローバル化などの影響を強く受けていることを考慮し、その現代の変容のあり方にも注目しつつ研究を進める。

なお、本プロジェクトは、AA研が主体となり2005年度から発足した拠点形成事業「中東イスラーム研究教育プロジェクト」の一環でもある。

[主査]	大塚 和夫			
[所員]	新井 和広	飯塚 正人	黒木 英充	
	近藤 信彰	床呂 郁哉	真島 一郎	
	宮崎 恒二	椎野 若菜		
[共同研究員]	青柳かおる	赤堀 雅幸	新井 一寛	
	石原美奈子	白杵 陽	宇野 昌樹	
	大川真由子	大坪 玲子	大稔 哲也	
	奥野 克己	菊地 滋夫	小杉 泰	
	小牧 幸代	斉藤 剛	坂井 信三	
	澤井 充生	清水 芳見	鷹木 恵子	
	高田 峰夫	多和田裕司	東長 靖	
	外川 昌彦	中田 考	長津 一史	
	中山 紀子	縄田 浩志	子島 進	
	信田 敏宏	花淵 馨也	堀内 正樹	
	三尾 稔	村上 薫	山岸 智子	
	吉田世津子			



共同研究プロジェクト

一般共同研究プロジェクト

人類社会の進化史的基盤研究(1)

本研究プロジェクトは、人類社会を霊長類から現生人類に至る進化の軸上で比較考察し、人類学における社会理論の新たな展開をめざそうとするものである。それによって人類の「文化」が社会形成にいかに関与しているかを再考する。

社会理論のなかで第一に問題となる「集団」に焦点を当てる。「集団」の概念を霊長類進化史上におくことにより、この概念の自明性を崩し、個体レベルの自他認識を越え「他集団」なる抽象的な他者の生成に到る「集団」の成りたちをふくめ、「集団」の認識(perception)の生成と展開を進化史的な視点から検討する。これにより、他者認知やアイデンティティといった個体間関係、およびテリトリーの生成とその認知、規則の発生と定着の過程といった個体間関係を越えた社会事象に至る問題群に迫る。

社会事象にあつて、「集団」は比較的顕在化(目に見えやすい)したものである。したがつて「人類社会の進化史的基盤研究」というときに、広く霊長類学的知見を含めて、人類史的規模での比較の橋頭堡が築きやすい。長期的なプロジェクト研究としては、継続的に「所有」、「制度」などを扱つてゆく予定であるが、その第一歩として、今回のプロジェクトを位置づけている。

共同研究員として、霊長類学の分野からは霊長類社会学および霊長類生態学の専門家、人類学の分野からは生態人類学、文化・社会人類学、人類生態学の専門家を加えている。これに社会思想史の専門家に参加してもらうことにより、霊長類から人類への架橋の理論的意義を考察する示唆を得たいと考えている。

また副次的な効果として、近年、社会生物学、行動生態学への理論的特化という傾向を強めつつある霊長類学研究を、人類との関係に再び位置づけることにより、日本における霊長類学および生態人類学の創成契機であつた人間存在の根源的かつ多元的理解という学的動機を回復しうることが期待される。

[主 査]	河合 香史			
[所 員]	西井 凉子	椎野 若菜	床呂 郁哉	
[共同研究員]	足立 薫	伊藤 詞子	内堀 基光	
	梅崎 昌裕	大村 敬一	北村 光二	
	黒田 末寿	杉山 祐子	曾我 亨	
	田中 雅一	寺嶋 秀明	中川 尚史	
	早木 仁成	船曳 建夫		



共同研究プロジェクト

所外代表による共同研究プロジェクト

漢字字体規範史の研究

中国・日本での漢字の字体規範の歴史を描くために、後代の字体の規範となった主要文献を厳選し、その一字一字(単字)の画像を切り出して整理し、文献の編纂地域・時代・刊本写本の別・料紙・装幀などの附随情報と共に取得・対照可能な「漢字字体規範データベース」を拡張・編纂して、「字体規範の編年」を試みるプロジェクト。

実際の画像撮影・文字画像切り出し・関連データ入力の作業は、中国(明まで)・日本(中世まで)・朝鮮(参考のため数点)・ベトナム(同左)と、日本近世・近代とに分割して行なうが、本

プロジェクトは、その両者を統合して「字体編年・字体規範の編年」に伴う諸問題を共有し・検討するために、共同研究プロジェクトとして行なうものである。

尚、本プロジェクトの前身「漢字字体規範データベース」HNGは、「東洋文字文化の継承と発展に寄与する優れた業績」であるとして昨年(2006年)6月、第一回「白川静記念東洋文字文化賞」を受賞した。<http://www.joao-roiz.jp/HNG/>

[主査]	石塚 晴通 (北海道大学名誉教授)
[所員]	豊島 正之
[共同研究員]	池田 証寿 岡墻 裕剛 小池 和夫 小宮山博史 高田 智和 府川 充男

語彙と文法

世界には多くの言語があり、その構造は多様である。そしてその構造に応じて、辞書・語彙集の形も変わってくる。例えば、英語やフランス語では、文法を知らなくても辞書はひける。単語の文法的变化が乏しく、出来合いの単語をそのまま辞書の見出しとしているからである。しかし、ドイツ語やロシア語では、出来合いの単語が見出しとはいえ、名詞なども変化するため、多少の文法的知識が必要となる。これがアラビア語になると、単語の基本は3子音であり、個々の単語はこれに様々な母音を組み合わせることによって形成される

ため、単語を見出しとすることは通常しない。またアメリカインディアン諸語などでは、複統合、抱合その他の現象により単語を見出しにすることは不可能な言語が多い。その場合、形態素が辞書の見出しとなることが多い。

本プロジェクトは、世界の様々な言語の辞書・語彙集を作成している研究者が、文法構造など言語の特徴性を、その語彙構造を通して考察しようとするものである。

[主査]	梶 茂樹 (京都大学)
[所員]	荒川慎太郎 星 泉 町田 和彦
[共同研究員]	中島 久 藪 司郎

インドネシアの国語政策と言語状況の変化

スハルト体制の終焉とともに、イデオロギーとしてのインドネシア語国語政策の下にこれまで封じ込められていた民族言語(地方語)が解放され、公共の場においてより自由な言説が生まれてきている。加えて、英語や中国語が都市部を中心に日常生活の中にこれまで以上に入り込んできている。これらの現象は、これまでのインドネシア語が担ってきた役割に変化が生じ、インドネシアの言語の様態に変化が生じていることを示唆しているように思われる。本プロジェクトでは、まず1945年の独立以降、インドネシア語が各地域社会においてどのように認識され、どのように「発展」してきたのか、インドネシア語とは何だったのかを再考することから始める。インドネシアの人々にとって国語とは何なのか、インドネシア語が国語と定められ、いかにして国語となっていた(ならなかった)のか、地域社会の言語(地方語)との関係性はどのようなものなのか。これらの

問題を、言語学、言語政策、文化人類学、社会学、メディア論、政治学、歴史学、文学、アイデンティティ、グローバル化などの観点から議論していく。

また、強権的な政治体制が崩れた頃から多様なメディアを通してグローバル化の影響がインドネシア社会に浸透して(外からの動き)きているが、一方で中央に対する地方の自治権も拡大(内からの動き)してきた。外からと内からの新しい動きが、どのようにインドネシアの言語状況に変化をもたらしたのか、今後もたらしていくと考えられるのかについても議論していきたい。

[主査]	森山 幹弘 (南山大学)
[所員]	塩原 朝子 宮崎 恒二
[共同研究員]	ウガ・ベルチェカ 鏡味 治也 柏村 彰夫 北村 由美 白石 さや 津田 浩司 長津 一史 原 真由子 舟田 京子



研究者招へい

本研究所は、国際的な共同研究を実施するために、海外からアジア・アフリカの研究者を外国人研究者として招聘しています。これらの研究者は、研究の内容に応じて研究ユニットないしセンターに配置されます。

そのほか国内の研究者や日本学術振興会や国際交流基金の招聘計画などで来日する海外の研究者をフェローとして積極的に受け入れ、学術交流を推進しています。

過去3年間に受け入れた研究者は以下のとおりです。

外国人研究員

受入年度	氏名	国籍	研究分野
2007	楼 宇烈	中国	中国哲学
	Diffloth, Gérard Félix	フランス	言語学
	李 力	中国	中国法制史
	Bhatia, Tej Krishan	アメリカ合衆国	言語学
	Imaeda, Yoshiro	フランス	チベット歴史・文献学
2006	尹 紹亭	中国	歴史・人類学
	Milner, Anthony	オーストラリア	東南アジア史学
	Beisembiev, Timur Kasymovich	カザフスタン	歴史学
	董 珊	中国	中国古文字学・考古学
	Janhunen, Juha	フィンランド	言語学、民族史
2005	Lestel, Dominique Pierre	フランス	動物行動学、哲学・認知心理学
	Sefatgol, Mansur	イラン	サファヴィー朝史
	Kedit, Peter Mulok	マレーシア	社会／文化人類学
	Brenzinger, Matthias	ドイツ	アフリカ言語学、アフリカ史
	Pudjiastuti, Titik	インドネシア	インドネシア文献学、歴史学
Subbarao, Karumuri Venkata	インド	言語学	

フェロー

受入年度	氏名	国籍（外国人フェロー）/所属（日本人フェロー）	研究分野
2007	清水 昭俊	元・一橋大学教授	社会人類学
	石井 溥	元・A A 研教授	人類学
	内堀 基光	放送大学教授	民族学、人類学
	川田 順造	元・A A 研教授	人類学
	Matthew William Mosca	アメリカ合衆国	歴史学
	高松 洋一		歴史学
	Ayisima Miersulitan	中国	言語学
	新江 利彦		歴史学
2006	川床 睦夫	元・中近東文化センター	考古学
	清水 昭俊	元・一橋大学教授	社会人類学
	Naw Si Blut	ミャンマー	政治史研究
	石井 溥	元・A A 研教授	人類学
	内堀 基光	放送大学教授	民族学、人類学
	Massoud Daher	レバノン	歴史学
	Abdallah Said	レバノン	経済史
	川田 順造	元・A A 研教授	人類学
2005	Matthew William Mosca	アメリカ合衆国	歴史学
	Roberts-Kohno Rosalind Ruth	アメリカ合衆国	言語学
	Naw Si Blut	ミャンマー	政治史研究
宮治 美江子	東京国際大学教授	人類学	



シンポジウム／ワークショップ

共同利用研究所としてのアジア・アフリカ言語文化研究所は、文部科学省「中核的研究機関支援プログラム」(平成7年度から13年度まで)により「卓越した研究拠点」(COE: Center of Excellence)に指定されて以降、学術研究の情報化、国際化にこれまで以上に重点をおいた事業を展開しています。国際化の面では、国内外の先端的研究を行っている研究者を

招聘し、国際シンポジウムやワークショップなどを開催しています。本研究所が日本における人文社会科学の分野で先導的な研究を推進していく上で、国際的な学術交流は、今後ますます重要な活動となっていくことは間違いありません。

以下のように活発にシンポジウムなどを開催しています。

主なシンポジウム・ワークショップ (開催時期・会場)

- アジア・アフリカ研究・教育コンソーシアム記念シンポジウム
「危機に瀕するアジア・アフリカの言語と文化」
(2007.3/7 AA研)
- 国際シンポジウム
"Ethnic Division of Polity and Society in Post-Civil War and Under-Conflict Nations: Cyprus, Lebanon, Former Yugoslavia, Iraq and Israel/Palestine"
(2007.1/28 麹町・東京グリーンパレス)
- 第3回総合人間学国際シンポジウム
「先端科学と人間らしさ」
(2007.1/13 AA研)
- 『大モンゴル国』創建800周年記念シンポジウム
「モンゴル世界：過去と現在のダイナミクス」
(2006.12/22～23 AA研)
- 資源人類学国際シンポジウム
(2006.12/9～10 AA研)
- 共同研究プロジェクト
「東地中海地域における人間移動と『人間の安全保障』」臨時研究会
「パレスチナ/イスラエルの地理情報学と地図」
(2006.12/8 AA研)
- 研究報告会「日本における中東・多文化研究の最前線」
(2006.11/27 イスタンブール・ボアジチ大学)
- 『OJA =アビジャン 2006』
—環境・映像・「人間の安全保障」をめぐる緊急国際集会
(2006.11/23～24 コートディヴォワール・ラフォンテーヌ映画館)
- 東京4大学連合文化講演会
「安全と安心の未来をさぐる～学術研究の最前線をわかりやすく解説する～」
(2006.10/30 千代田区・一橋記念講堂)
- 国際ワークショップ「アムール川流域からみた露清関係」
(2006.9/8 日本大学文理学部図書館オーバルホール)
- 緊急ワークショップ
「中東戦争の深淵—イスラエルの対レバノン攻撃をめぐって」
(2006.7/21 明治大学リパティタワーリパティホール)
- 連続国際ワークショップ「近代レバノンの歴史を考える」
(2006.7/8・14 AA研)



シンポジウム／ワークショップ

過去に行われたシンポジウム (時期・会場)



- 中東イスラーム研究教育プロジェクト:
W. O. Beeman氏公開講演会
(2006.7/6 AA研)
- AMBIGUITY IN LINGUISTIC ANALYSIS
(2005.12/17～18 AA研)
- 「ペルシア語文化圏研究の可能性」
(2005.12/3～4 AA研)
- 総合人間学国際シンポジウム
「諸文明から未来世界を構想する」
(2005.10/22～23 新宿・センタービル51階サンスカイルーム)



- 国際シンポジウム「中国系移民の選択的アイデンティティ：
僑居化から土着化、トランス・ナショナリティまで」
(2005.9/29 AA研)
- 「アジア人間科学への道—東洋学とアジア研究」
(2005.9/24 東京大学文学部1 番大教室)
- アジア・アフリカドキュメンタリー映画会議2005
「排除の表象にたじろがぬ表象を」
(2005.9/23～24 東京大学駒場キャンパス18号館ホール)
- 「"モンゴル"の領域」
(2005.7/20 AA研)
- 「分断から統合へ?—キプロスを中心とした
東地中海地域変容の多角的分析」
(2005.7/19 AA研)



- 「変貌するアフリカ・変貌する諸学との対話
—生態人類学、47年後の意味」
(2005.5/28 東京外国語大学マルチメディアホール)
- 「オスマン地中海世界における政治経済交流」
(2005.4/23 AA研)
- 「台湾原住民研究～日本と台湾、過去と現在」
(2005.3/26～27 AA研)
- 「在臺灣發現日本～台湾における植民地支配と日本」
(2005.3/5～6 AA研)
- 「9.11後の世界における政治的暴力と人間の安全保障」
(2004.12/18～19 国際連合大学エリザベス・ローズホール)
- 音調に関する通言語的研究：
—歴史的発展、音声学的基盤および記述研究
(2004.12/14～16 AA研)
- 現代アラブ世界における歴史研究：
マグリブとマシュリクから
(2004.11/4 AA研)



外国研究機関との共同研究

本研究所は、かねてより海外の研究機関と研究資料・情報の交換、研究員の相互交流、共同研究調査の実施等を通じ学問上の国際協力・共同研究を進めています。またこれら

の機関のいくつかと正式に学術協定を結び、国際協力の一層の充実を図ろうとしています。

これまでに学術協定を結んだ研究機関は、以下のとおりです。

■これまでの外国研究機関との共同研究

締結年	国	機 関	共同研究締結内容	協力する分野
2007	ドイツ	ケルン大学 アフリカ学研究所	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所とケルン大学アフリカ学研究所との間における学術交流に関する協定書	アフリカ言語学、 アフリカ人類学
2005	インド	高等コンピューティング 開発センター (CDAC)	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 (ILCAA)、東京、日本および高等コンピューティング開発センター (CDAC)、ブネー、インド間の学術協定に関する申し合わせ覚書	言語解析、情報学
2005	フランス	パリ人間科学館 (MSH)	学術協力協定：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 (ILCAA)、東京、日本および人間科学館 (MSH)、パリ、フランス	総合人間学
2005	レバノン 共和国	レバノン大学 人文科学部第1部 (FHS-ILU)	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 (日本) とレバノン大学人文科学部第1部 (レバノン共和国) との学術協力に関する申し合わせ	現地研究拠点活動に 係る専門分野
2005	レバノン 共和国	ドイツ東洋学会ベイルート・ ドイツ東洋学研究所 (OIB)	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 (日本) とドイツ東洋学会ベイルート・ドイツ東洋学研究所 (レバノン共和国) との学術協力に関する申し合わせ	現地研究拠点活動に 係る専門分野
2005	レバノン 共和国	ベイルート・ アメリカン大学 (AUB)	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 (日本) とベイルート・アメリカン大学 (レバノン共和国) との学術協力に関する申し合わせ	人文科学、社会科学、 自然科学
2004	コート ディヴォワール 共和国	アフリカ 演劇コミュニケーション 研究・育成・創成センター (CARAS)	学術協力に関する同意書	内戦・民族紛争など 人間の安全保障をめぐる 緊急の課題

外国研究機関との共同研究

締結年	国	機関	共同研究締結内容	協力する分野
2004	オーストリア	オーストリア 科学アカデミー (AAS)	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(日本)とオーストリア科学アカデミーとの学術協力に関する覚え書	インド学、仏教学、 文献情報学
2000	インドネシア	インドネシア科学院 社会文化研究センター (PMB-LIPI)	アジア・アフリカ言語文化研究所(日本)とインドネシア科学院社会文化研究センターとの学術協力に関する覚え書	文化人類学
1997	ラオス	文化研究所 (IRC)	アジア・アフリカ言語文化研究所(日本)と文化研究所(ラオス人民民主共和国)との間の学術協力に関する協定書	人文科学のすべての分野、 及びこれに関連する分野
1996	イラン	農業計画・ 経済研究センター (C.A.P.E.S.)	農業計画・経済研究センター (C.A.P.E.S.) と東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 (ILCAA) の研究協力協定書	イラン文化・日本文化
1988	マリ	人文科学研究所 (ISH)	マリ共和国人文科学研究所と東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所との間の学術協力に関する協約書	人文科学のすべての分野、 及びこれに関連する分野
1988	フランス	チベット言語文化研究所 (LCAT)	フランス共和国チベット言語文化研究所(略称LCAT)と日本国東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(略称ILCAA)との間の学術協力に関する協約書	言語学およびチベット語と 日本語に関連したその他の 専門分野
1987	インド	インド統計研究所 (ISI)	インド共和国インド統計研究所(略称ISI)と日本国東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(略称ILCAA)との間の学術協力に関する協約書	言語学およびインド諸語と 日本語に関連したその他の 専門分野
1987	インド	文部省インド諸語 中央研究所 (CIIL)	インド国文部省インド諸語中央研究所(略称CIIL)と日本国東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(略称ILCAA)との間の学術協力に関する協約書	言語学およびインド諸語と 日本語に関連したその他の 専門分野
1978	カメルーン	国立科学技術研究機構 (ONAREST) (現・高等教育・情報科学・ 科学研究省 (MESIRES))	カメルーン連合共和国国立科学技術研究機構と東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の間の科学的協力に関する同意書	人文科学の総ての分野、 特に社会学、言語学、歴史学、 民族学



フィールドサイエンス研究企画センター (FSC)

■目的

フィールドサイエンス研究企画センター(略称FSC)は、2005(平成17)年度から所内措置により活動を開始していましたが、2006(平成18)年4月に正式に発足しました。AA研の研究活動を特徴づけてきた臨地調査の手法をより実践的・理論的に開発して、さまざまな学問の領域を横断する「フィールドサイエンス」という「現地学」を構築するとともに、調査関連データを体系的に蓄積し、臨地調査に関わる研究者間の連携を担うことを目的としています。

■活動の指針

FSCの当面の活動には、次の7本の柱から成ります。特に(1)～(4)については、これらを包括する研究事業「中東イスラーム研究教育プロジェクト」の事業本部をFSCに置き、その推進主体の役割を果たします。この事業は、現在のアジア・アフリカを俯瞰した際に中東・イスラーム圏に焦点を当てた研究が極めて重要であるとの認識に立って、2005(平成17)～2009(平成21)年度文部科学省特別教育研究経費をもって実施するものです。

(1)研究手法の開発

海外での臨地調査に関わる手法を実践的・理論的に開発することを、FSCの研究に関わる業務活動とします。このためにフィールドサイエンス・コロキウムという研究会を随時開催し、様々な専門分野の研究者とともに調査手法やデータの意味づけ、さらに研究者と研究対象の関係性の問題などを集中的に議論し、情報・知識・経験の共有化を目指します。

(2)大型共同研究プロジェクトの実施

「ムスリムの生活世界とその変容」などをテーマとした、大型研究プロジェクトを実施します。具体的には、中東・イスラーム圏を中心にグローバルな視野を持つ複数の共同研究プロジェクトを相互に関連させつつ、協同して推進します。

(3)研修事業

上記の成果の社会還元の一部として、研究手法に関わる研修「中東・イスラーム研究セミナー」(7月・12月)、「中東・イスラーム教育セミナー」(9月)、「ペルシア語文書学セミナー」(7月)を実施します。それぞれ博士論文執筆予定レベルの若手研究者、大学院生の研修生を公募し、地域や専攻分野の枠を超えた学際交流の場を提供します。

(4)現地研究拠点の設置

上記(1)～(3)の活動を効果的に遂行するため、レバノンのベイルートに設置した研究拠点「中東研究日本センター」を中心に、中東地域・イスラーム圏との学術交流を推進し、わ

が国におけるこの地域の研究の先端的拠点となることを目指します。(→p.29参照)

(5)ニーズ対応型地域研究の推進

2006(平成18)～2010(平成22)年度に実施される文部科学省「世界を対象としたニーズ対応型地域研究推進事業」の一つである「東南アジアのイスラーム：トランスナショナルな連関と地域固有性の動態」プロジェクトを推進する母体となります。

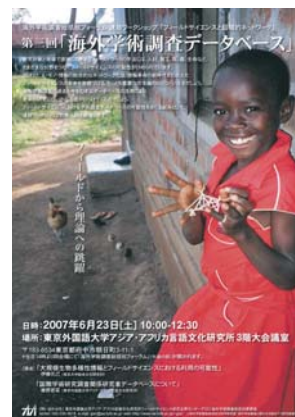
(6)海外学術調査総括班

「海外学術調査総括班」は、1964年以来、AA研に事務局をおきつつ、科学研究費補助金(海外学術調査)にかかわる研究者間、および研究者側と日本学術振興会の間の情報交換、連絡調整などに当たってきました。海外学術調査の研究組織の代表者を集めた「海外学術調査総括班フォーラム」の開催、国際情勢に即応した研究を可能にするための現地調査、これまでの海外学術調査に関するデータのウェブページにおける限定公開とその利用の開発など、活動は多岐にわたります。FSCが「総括班」の実績を継承し、さらに展開していきます。

(7)地域研究コンソーシアムとの連携

「地域研究コンソーシアム」は、地域研究に関わる全国の幅広いアカデミック・コミュニティに立脚して、関連情報を蓄積し、研究組織のネットワークを形成することを目的としています。AA研は拠点組織の一つとしてコンソーシアムの設立準備に当たり、2004(平成16)年4月にこれを発足させました。現在、AA研は幹事組織の一つとして理事、運営委員長を出すなど、コンソーシアムの活動の中で大きな役割を果たしていますが、FSCはその連携活動の窓口として機能します。

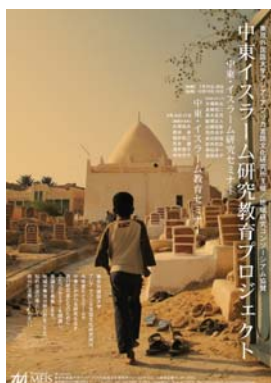
FSCのURL <http://www.aa.tufs.ac.jp/fsc/> もご覧ください。





フィールドサイエンス研究企画センター (FSC)

中東イスラーム研究教育プロジェクト (略称MEIS)



Project
MEIS
at TUFS

中東イスラーム世界の政治・社会・文化に関する研究を積極的に推進するために、学部・大学院のスタッフとも協力しながら、2005(平成17)年度から5カ年計画でスタートした事業です(文部科学省特別教育研究経費による)。イスラーム世界に設けられる現地研究拠点での共同研究の展開を軸に、高度な研究プロジェクトの組織運営から、さまざまなレベルにおける研修・教育活動までをカバーしています。

AA研のスタッフが主として取り組んでいる事業は、以下のものです。

- (1) 現地研究拠点の設立と運営—レバノンのベイルート拠点の開所式を2006(平成18)年2月に行い、活動を開始しています(p.27を参照してください)。さらに、マレーシアのコタキナバル拠点も開設準備中です。
- (2) 中東・イスラームに関する共同研究プロジェクトの実施(p.8の共同研究プロジェクト一覧を参照してください)。
- (3) 全国の大学院生や博士課程満期修了者などを対象とした中東・イスラーム研究セミナーと中東・イスラーム教育セミナーの運営(次項を参照してください)。

その他、国内・国外の研究者を招いた研究会やシンポジウム、アラビア語、ペルシア語、ジャワ語の文献学・文書学セミナーなども行っています。

このような活動を通して、日本における中東やイスラーム研究の全国的な発展や国際的展開に貢献するとともに、次世代を担う若手研究者のための研修事業も進めております。

また、東京外国語大学外国語学部・大学院では中東・イスラームに関する授業・講義の充実(AA研スタッフも協力しています)に努めるとともに、中東の主要メディアの記事の日本語翻訳をWebページで公開して、広く社会に最新の中東情報を提供しております。

なお、本プロジェクトのより詳しい説明は、下記のWebページをご覧ください。

<http://www.tufs.ac.jp/common/prmeis/>

■中東・イスラーム研究セミナー、中東・イスラーム教育セミナー

2005(平成17)年度から始まった中東イスラーム研究教育プロジェクトの一環として、AA研が推進している事業です。中東もしくはイスラーム世界に知的・学問的関心を持ち、調査・研究を進めようとしている若手研究者(大学院生以上)を対象に、この研究領域に関する最新の学問的情報を提供して知識の幅を広げ、問題意識にあふれた研究発表を通して研究会などにおけるプレゼンテーションやディスカッションのスキルを向上させることを目的とした研修事業です。人文・社会科学分野が中心になりますが、受講者の専門分野は特に限定しておりません。

中東・イスラーム教育セミナーは大学院生を対象に、AA研スタッフと招聘講師による講義、そして希望者による研究発表から構成されています。学部段階からこの研究領域に関心を持ち続けてきた院生はもとより、専門分野の基礎はできているが中東やイスラームにそれほど深い知識を持たない院生も受け入れ、中東・イスラーム世界とさまざまな専門分野の基礎的な知識の提供、そして受講者の間の討論を通じた意見・知識の交換の場を作っております。

中東・イスラーム研究セミナーは、それよりも一段高度なレベルの研究者、すなわち大学院博士課程後期(博士課程)および博士論文の準備をしている方々を対象にしています。ここでは講義は行わず、共同研究プロジェクト方式を採用し、研究発表とそれに基づく質疑応答・討論の機会を提供します。それを通して博士論文執筆のヒントを得たり、異なる研究分野や地域の研究者との意見交換から知識の幅を拡充したりすることが期待されます。年に1回の教育セミナーとは異なり、少人数で行われる研究セミナーは、年に2回開催されます。

なお本事業は、2006(平成18)年度から、東京外国語大学大学院、および同大学院と単位互換協定を結んでいる他大学の大学院に所属している大学院生にとっては、単位履修申請科目となっております。

本事業のより詳しい説明、ならびにこれまでの受講生のセミナーに対する感想・評価に関しては、下記のWebページをご覧ください。

http://www.aa.tufs.ac.jp/fsc/meis/kyouiku_s.html (教育セミナー)

http://www.aa.tufs.ac.jp/fsc/meis/kenkyu_s.html (研究セミナー)



フィールドサイエンス研究企画センター (FSC)

東南アジアのイスラーム ートランスナショナルな連関と地域固有性の動態 (略称ISEA)



ISEA(「東南アジアのイスラームートランスナショナルな連関と地域固有性の動態」)は、社会的に影響力を強めつつある東南アジアのイスラームに関して、ローカルな文脈におけるその固有性を実証的に明らかにすると同時に、中東などに端を発するトランスナショナルなイスラーム復興やイスラーム主義等の諸潮流が当地のローカルな文化や社会に及ぼす影響など、ローカルとトランスナショナルの二つの次元の関係性や動態を解明することを大きな目的としています。またそのローカルとトランスナショナルの動態が政治や経済、紛争や平和構築などといった広義の公共領域へ及ぼしうる影響について、中東研究者を含む複数の分野(歴史学、人類学、政治学、国際関

係論、法学、宗教学等)の研究者や実務家等の協働によって具体的に解明することを目指します。本プロジェクトは文部科学省が新規に設立した「世界を対象としたニーズ対応型地域研究推進事業」枠によって2006年10月より四年半計画で実施するものです。

ISEAの活動の詳細については下記ウェブサイトをご覧ください。
<http://www.aa.tufts.ac.jp/fsc/isea/>

中東研究日本センター (Japan Center for Middle Eastern Studies 略称JaCMES)

中東研究日本センターは、AA研がレバノンの首都ベイルートに設置した初の海外研究拠点です。2005年12月15日にレバノン政府閣議決定による認可を受けて、2006年2月1日に開所式を行いました。

中東研究日本センターの活動は、フィールドサイエンス研究企画センターの事業の一角を構成すると同時に、文部科学省特別教育研究経費「中東イスラーム研究教育プロジェクト」事業の一部でもあります。

この研究拠点の設置目的は、(1)日本における中東研究の基盤を強化すること、(2)日本と中東、とりわけレバノンとの間の直接的学術交流を推進すること、(3)中東研究を志す日本の若手研究者を支援すること、を主なものとしています。

そして次のような活動を推進することにより、AA研の全国共同利用機能を海外において展開することを目標としています。

(1)国際シンポジウムの開催

レバノン人も含めた国際的共同研究を推進し、その一環として国際シンポジウムを開催します。「内戦後社会における記憶の役割」「イスラームと他者性」「オスマン期シリア地域における異教徒間関係」といったテーマを想定しています。

(2)ベイルート研究報告会議

日本の博士課程大学院生や学位取得後の若手研究者が最新の研究報告を行い、レバノンを初めとした中東現地の研究者らと交流する機会を提供します。

(3)若手研究者の調査派遣

日本の若手研究者を派遣して、一定期間、現地調査に従事する機会を提供します。

(4)日本中東関係講演会

日本と中東の関係、日本におけるイスラームの歴史などを専門とする研究者を派遣して講演していただき、交流の歴史と現状について啓蒙する機会を設けます。

(5)中東研究者の招聘による研究会開催

レバノンを初めとして中東地域から研究者を日本に招聘して講演会やセミナーなど研究会を行い、直接的な学術交流を推進します。

(6)ベイルート学術情報の紹介

ベイルートを中心にレバノンの活発な学術・文化的活動の情報を収集し、ウェブページで公開して紹介します。

なお、2007(平成19)年度の中東研究日本センター長は、フィールドサイエンス研究企画センター長が兼務します。

所在地: Japan Center for Middle Eastern Studies (JaCMES)
2nd Floor, Azarieh Building, A2-1, Bashura, Emir Bashir Street,
Central District, Beirut, LEBANON

TEL/FAX: +961-1-975851

URL: <http://www.aa.tufts.ac.jp/fsc/jacmes/>





研究未開発言語文化の調査事業

これまで研究の蓄積のないアジア・アフリカの言語文化に関する資料を収集し、それらの研究を促進するため、本研究所では、研究者をアジア・アフリカの諸国及びそれらの旧宗主国に計画的に派遣しています。これまで派遣された研究者ならびに派遣先は以下の通りです。

派遣期間	派遣された研究者	
2006-2008	河合 香吏 (ケニア、ウガンダ、スーダン、英国)	
2005-2006	角谷 征昭 (タンザニア)	
2003-2005	陶安 あんど (イギリス、フランス、中国)	太田 信宏 (イギリス、インド)
2001-2003	床呂 郁哉 (スペイン、オランダ)	呉人 徳司 (アメリカ、ロシア)
1999-2001	澤田 英夫 (オーストラリア、インド)	本田 洋 (韓国、イギリス)
1997-1999	吉澤 誠一郎 (フランス、イギリス、中国、台湾)	西井 涼子 (タイ、イギリス)
1995-1997	飯塚 正人 (エジプト、イギリス)	黒木 英充 (シリア、フランス)
1993-1995	新免 康 (中国、独立国家共同体、イギリス)	根本 敬 (イギリス、ビルマ)
1991-1993	栗原 浩英 (ベトナム、ロシア)	峰岸 真琴 (インド)
1989-1991	林 徹 (中国、トルコ)	栗本 英世 (エチオピア、ケニア)
1987-1989	松村 一登 (フィンランド、ソ連)	宮崎 恒二 (オランダ、インドネシア)
1985-1987	中見 立夫 (中国、モンゴル)	梶 茂樹 (ザイール、ケニア、ザンビア)
1983-1985	辻 伸久 (中国、香港)	水島 司 (インド)
1981-1983	山本 勇次 (ネパール)	新谷 忠彦 (ニューカレドニア)
1979-1981	羽田 亨一 (イラン、トルコ)	清水 宏祐 (アラブ連合、イラン、トルコ)
1977-1979	石井 溥 (ネパール)	藪 司郎 (ビルマ)
1975-1977	加賀谷 良平 (ボツワナ)	湯川 恭敏 (タンザニア、ザイール)
1973-1975	福井 勝義 (ソマリア)	中嶋 幹起 (香港)
1971-1973	内藤 雅雄 (インド)	中野 暁雄 (モロッコ、南イエメン)
1969-1971	松下 周二 (ナイジェリア)	家島 彦一 (アラブ連合)
1967-1969	石垣 幸雄 (エチオピア)	守野 庸雄 (タンザニア)



競争的研究経費などによる研究

本研究所では、臨地研究、アジア・アフリカの言語文化に関する研究を展開し、また研究成果の情報化などをより一層推進する為に、「科学研究費補助金」や民間の財団による研究助成に積極的に応募して研究経費を獲得しています。

最近では、民間機関などと共同で行う研究プロジェクトが発足し、研究成果のより実践的な応用等にも貢献しています。以下で紹介するのは、本研究所のスタッフが代表者になって行われている種々のプロジェクトです。

■2007年度 科学研究費補助金プロジェクト

研究種目	代表者名	課 題 名	採択期間
基盤研究(A)一般	永原 陽子	脱植民地化の双方向的歴史過程における「植民地責任」の研究	H19-H22
基盤研究(A)一般	芝野 耕司	AJAXを用いた直接操作・多言語・語学教育e-Learning OSSの開発	H19-H21
基盤研究(A)一般	真島 一郎	フィールドワークの理論と手法に関する総合調査：海外学術調査の展開をとおして	H18-H21
基盤研究(A)一般	宮崎 恒二	高齢化社会と国際移住に関する文化人類学的研究： 東南アジア・オセアニア地域を中心に	H17-H20
基盤研究(A)一般	黒木 英充	新たな東地中海地域像の構築－民族・宗派対立と人間移動	H16-H19
基盤研究(A)海外学術調査	飯塚 正人	9.11後のイスラーム世界におけるイスラームフォビア意識の浸透に関する研究	H18-H21
基盤研究(A)海外学術調査	ペーリ・バースカララオ	南アジア・東南アジア地域少数民族言語の語彙・文法調査	H17-H19
基盤研究(A)海外学術調査	三尾 裕子	東南アジアにおける中国系住民の土着化・クレオール化についての人類学的研究	H16-H19
基盤研究(B)一般	高島 淳	クメール、チャム碑文資料に基づくシヴァ教の研究	H19-H22
基盤研究(B)一般	中見 立夫	ロシア帝国と「東北アジア」の成立－国際関係史の視点から－	H19-H21
基盤研究(B)一般	呉人 徳司	複統合性をめぐる北東シベリア・北アメリカ先住民言語の比較研究	H16-H19
基盤研究(B)海外学術調査	深澤 秀夫	会話と手話の相互行為分析に基づく マダガスカル言語文化の共通構造と差異の比較研究	H19-H21
基盤研究(B)海外学術調査	近藤 信彰	近世・近代ペルシア語文化圏における言語・民族・国家形成	H18-H21
基盤研究(B)海外学術調査	菅原 純	近現代テュルク諸語文献を中心とする内陸アジア歴史資料リソースの構築	H18-H21
基盤研究(B)海外学術調査	中山 俊秀	北米先住民諸語自然談話テキスト資料の体系的収集	H18-H20
基盤研究(B)海外学術調査	新谷 忠彦	言語・文化調査に基づくパラウン史の解明	H17-H20
基盤研究(C)一般	長崎 郁	コリマ・ユカギール語の記述言語学的研究	H19-H22
基盤研究(C)一般	渡部 良子	ペルシア語書簡術・文章術とイラン・イスラーム文化	H19-H22
基盤研究(C)一般	荒川 慎太郎	西夏時代の河西地域における歴史・言語・文化の諸相に関する研究	H19-H21
基盤研究(C)一般	西井 涼子	タイにおけるムスリム・コミュニティの「改宗」をめぐる人類学的比較研究	H19-H21
基盤研究(C)一般	尾立 要子	周辺からの共和主義：フランス海外領政策にみる共和主義の変容	H18-H20
基盤研究(C)一般	新江 利彦	ベトナムの日本ODA案件実施地域における少数民族の土着知識継承に関する研究	H18-H20
基盤研究(C)一般	峰岸 真琴	ミャンマー東北地方パラウン語の記述および使用状況の研究	H18-H19

競争的研究経費などによる研究

研究種目	代表者名	課 題 名	採択期間
基盤研究(C)一般	稗田 乃	ナイル諸語の通時的研究—ナイル諸語比較語彙集の作成—	H17-H20
基盤研究(C)一般	高松 洋一	オスマン朝のアーカイブズの復元に関する基礎的研究	H17-H19
基盤研究(C)一般	床呂 郁哉	スーロー海域世界におけるサマ語系民族集団の移動と越境に関する文化人類学的研究	H16-H19
若手研究(スタートアップ)	椎野 若菜	配偶者不在の家族にみる社会形態の変化—性と結婚をめぐる東アフリカ二社会の比較研究	H18-H19
若手研究(B)	若狭 基道	ウォライタ語(エチオピア)及びその周辺言語の記述的研究	H19-H22
若手研究(B)	新井 和広	インド洋におけるアラブ(ハドラーミー)のネットワークに関する基礎研究	H18-H20
若手研究(B)	角谷 征昭	ニハ語(タンザニア南西部)の記述と隣接言語との相関	H18-H20
若手研究(B)	丹菊 逸治	ニヴフ民族の口承文学資料の再検討と生活史における位置づけの研究	H18-H20
若手研究(B)	永井 佳代	シベリア・ユピック語の文字・音声資料の電子コーパス化とその利用に基づく記述研究	H18-H20
若手研究(B)	伊藤 智ゆき	19世紀中国語—朝鮮語対音資料の音韻論的研究	H18-H19
若手研究(B)	塩原 朝子	バリ語(インドネシア)の形態、統語、意味にかかわる包括的研究	H17-H19
萌芽研究	小田 淳一	計量修辭学による文彩の情報学的分析	H18-H20
特別研究員奨励費	溝辺 泰雄	アフリカ独自の近代化・自立的発展論に関する歴史的研究：植民地初期のガーナの事例から	H19-H21
特別研究員奨励費	児島 康宏	グルジア語における文の構造と意味論・語用論	H18-H20
特別研究員奨励費	溝口 大助	マリ南部セヌフォ社会における社会・経済的变化と宗教的实践に関する人類学的研究	H18-H20
研究成果公開促進費 (研究成果データベース)	町田 和彦	「言語学大辞典」データベース	H19
研究成果公開促進費 (学術図書)	伊藤 智ゆき	朝鮮漢字音研究	H19

■2007年度 受託研究・受託事業プロジェクト

課 題 名	所 員 名	機 関
人文・社会科学振興のためのプロジェクト研究事業 「地域研究による『人間の安全保障学』の構築」	黒木 英充	(独)日本学術振興会
言語資源に関する所在調査と入力システム開発	町田 和彦	(独)科学技術振興機構
世界を対象としたニーズ型対応地域研究推進事業「東南アジアのイスラーム」	床呂 郁哉	文部科学省
次世代インターフェースとしての多言語コンシェルジュの研究開発	町田 和彦	総務省
文化人類学分野に関する学術動向の調査研究	三尾 裕子	(独)日本学術振興会

研究資源拠点

臨地研究に基づく研究拠点

研究資源拠点

研究者養成のための教育・広報活動

アジア・アフリカ諸地域の
資料と情報を編纂し
研究資源として
国際的に共有するための
研究資源拠点としての活動

- 情報資源利用研究センター(IRC).....34
- 音声学実験室36
- アジア書字コーパス拠点(GICAS).....37
- 文献資料コレクション38



情報資源利用研究センター(IRC)

1. 設置目的

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所情報資源利用研究センター (Information Resources Center / ILCAA 略称 IRC-ILCAA) は、アジア・アフリカの言語文化に関する情報資源の蓄積・加工・公開と、それを活用した共同研究手法の開発、国際学術交流の推進を目的として、平成9 (1997) 年度に設置されました。

2. 研究所とセンター

本研究所は、従来から、アジア・アフリカの諸言語のデータをデジタル化し、それぞれの言語の音韻論的・統語論的・語彙論的分析をおこなうとともに、歴史的・民族的・社会学的研究等、多目的な用途に供するデータベースの充実を図ってきました。このデータベースは、本研究所の最も重要な事業のひとつである、アジア・アフリカの諸言語の辞典・文典の編纂の基礎資料を提供し、かつ全国の研究者の共同利用に供されています。



言語地図「北東ユーラシアの言語文化」



トナカイ遊牧民チュクチの伝統文化に関する画像データ



デジタル言語文化館「カイロの肖像・19世紀」より、「ナスル門とカイロの城壁」

3. 活動の指針

センターは、上記のようなこれまでの研究所の活動を基礎に、下記の点で、理論・技術の整備・洗練を行うことをめざしています。

(1) アジア・アフリカの言語文化に関するコンテンツ公開の場として

所内には、上記のような言語データだけでなく、アジア・アフリカの言語文化に関する多様な資料(パンフレット、ポスター、フィルム、8ミリ、ビデオ、録音テープ等)が豊富に所蔵されています。このデータの所内・所外での利用は必ずしも容易ではなく、公開に向けた整備を継続して行っています。

(2) 国際的共同研究の場として

データベースを国際的に公開・共有し、それに基づく研究支援の環境をつくり、国際的共同研究の効率化と内容の充実を図ることをめざしています。

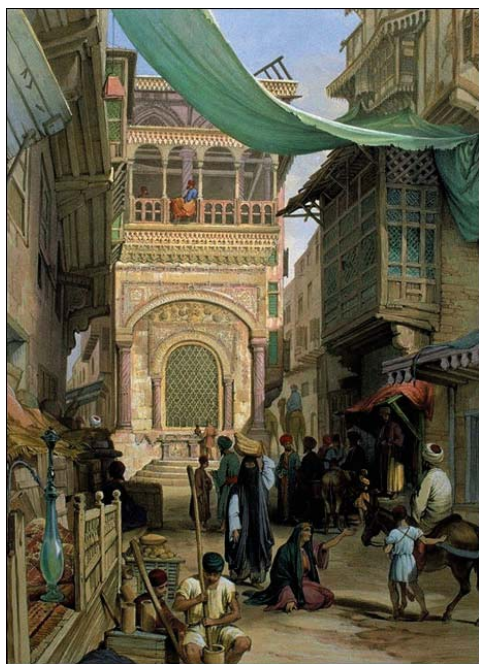
(3) コンテンツ蓄積・交換に関する基礎理論の整備母体として

通時的文字論を考慮した文字コード(符号化文字集合)論、多言語処理論、多表記系(スクリプト)の照合(collation)・整形・組版基礎理論等、従来、理論的な整備がほとんどない分野を理論化することは急務といえます。また、多表記系(スクリプト)混在でのinput methods、整形・組版結果の交換プロトコル等、まだ仕様自体が不安定な分野の仕様の洗練、さらには、画像・動画・音声抽象検索などのマルチメディア系でのinput methodsとインタフェースにも、今後積極的に関与していく予定です。

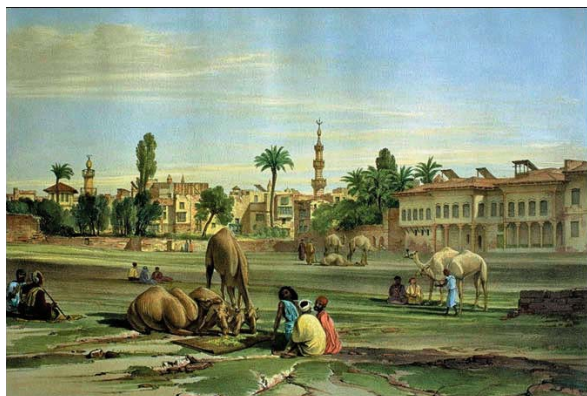
4. 今年度の主な研究事業

今年度も引き続き、センター運営費によるデータベース構築、言語文化研究の共同研究体制の強化、言語文化に関する一次資料の資源化のためのプロジェクトを企画し、実施していきます。具体的には「故小倉泰撮影写真資料のデータベース化」(代表：高島淳)、「中国古文字資料コーパスの研究」(代表：陶安あんど)、「日本人の言語能力発達過程のコーパス化」(代表：峰岸真琴)、「言語の記述データ処理環境の構築」(代表：中山俊秀)などのプロジェクトが予定されています。

それと並行して、本年度は設置以来の成果を総括して、改組案をとりまとめるとともに、国内外の研究者との連携体制をさらに強化することに活動の重点をおきます。



デジタル言語文化館「カイロの肖像・19世紀」より
「バイナル・カスラインと公共の給水泉」



デジタル言語文化館「カイロの肖像・19世紀」より
「シャリーフ・ベイ宮殿の風景」



デジタル言語文化館「カイロの肖像・19世紀」より、「イブン・トゥールーン・モスクの大ミナレットと外側の一部」

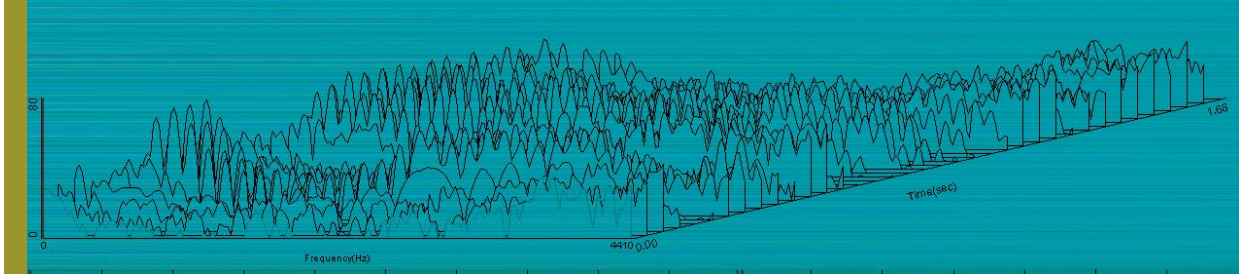
5. デジタル言語文化館

センターでは、研究活動の成果を発信するために、インターネット上に「デジタル言語文化館」を開館しています。この「デジタル言語文化館」は、コンテンツのみならず、その加工・呈示技術やそれらの技術の背景となる理論自体もコンテンツとして含む点を特徴としており、従って、蒐集展示及び蒐集資料・技術の双方の利用を可能にしているところが、従来のデジタルライブラリ(電子図書館)発想を越える点であるということが出来ます。

6. 技術と研究の相互発展

センターは、望まれる技術の要求仕様を策定するのであって、技術自体を開発する場ではありません。望まれる技術とは、新しい技術の呈示によって技術への需要自体を呼びおこし、その結果、新たな研究工具を提供することで研究開拓のきっかけとなるような技術であり、すなわち、今は「技術的制約によって無理」と諦められ、研究分野自体が研究として認識されていないものを、明らかにするような技術を指します。

研究者の主目的発想による技術仕様の策定は、本センターのように、言語・歴史・民族・情報の各分野の専門研究者を擁し、技術と研究の相互刺戟を主眼として研究を進める専門機関によって、はじめて生れ得る成果といえましょう。



音声学実験室

本研究の音声学実験室は、言語音の基礎研究に関する分析や実験を行うために必要不可欠な設備を備えています。コンピュータスピーチラボ (CSL4500) は、多機能な発話信号分析機器です。音声などのアナログ信号を高品質でコンピュータに取り込み、スペクトログラム・フォルマント軌跡・LPC (線形予測符号化) 周波数反応・FFT (高速フーリエ変換) パワースペクトル・LTA (長期平均) パワースペクトル・ケプストラム分析・ピッチ曲線分析・エネルギー曲線分析など、さまざまなタイプの分析を行うことができます。また、波形編集・チャンネル編集・時間編集・振幅編集などの基本的な編集機能や、記録・再生の機能も当然ながら有しています。さらに、リアルタイム・スペクトログラム分析とリアルタイム・ピッチ分析を行うためのCSL専用ソフトウェアも利用可能です。この機器は、言語学的観点から見た発話音の様々な側面の分析を行うのに適切なものです。

音声学実験室に備えられた音声・言語ライブラリには、所員をはじめとする研究者がフィールド調査を通じて収集してきた言語音・民話・民族音楽など貴重な録音資料が保管されています。これらフィールド調査の成果である録音ディスク・テープの一部および世界諸言語の録音ディスク・テープは、借り出すことができます。実験室にある分析機器・録音機器・メディア変換用機器などのハードウェアとソフトウェアには使用説明書が備えられ、利用者の便を図っています。

音声学実験室内には、防音スタジオが用意されています。スタジオに備えつけられた最新型のソリッドステートデジタル録音機を使用して、話者の発話サンプルの高品位な録音を行い、実験室の機器を用いてそれを分析することができます。



防音スタジオ



CSLを用いた音声分析のひとつ



CSLのスクリーンショット。波形・スペクトログラム・ピッチ曲線の表示。

アジア書字コーパス拠点(GICAS)

GICAS「アジア書字コーパス拠点」は、文部科学省のCOE拠点形成・特別推進研究(COE)「アジア書字コーパスに基づく文字情報学の創成」(Grammatological Informatics based on the Corpora of Asian Scripts)によって平成13(2001)～17(2005)年度の5年度にわたり補助金を得て形成されてきた「COE研究拠点」の一つです。

GICAS拠点が体系化を目指す「文字情報学」は、アジアにおいてとりわけ豊饒な「文字」を情報通信の基盤メディアとして捉え直し、ここに国際的な文字情報通信で求められる学問的基礎を与えることを目的とする新しい学問領域です。

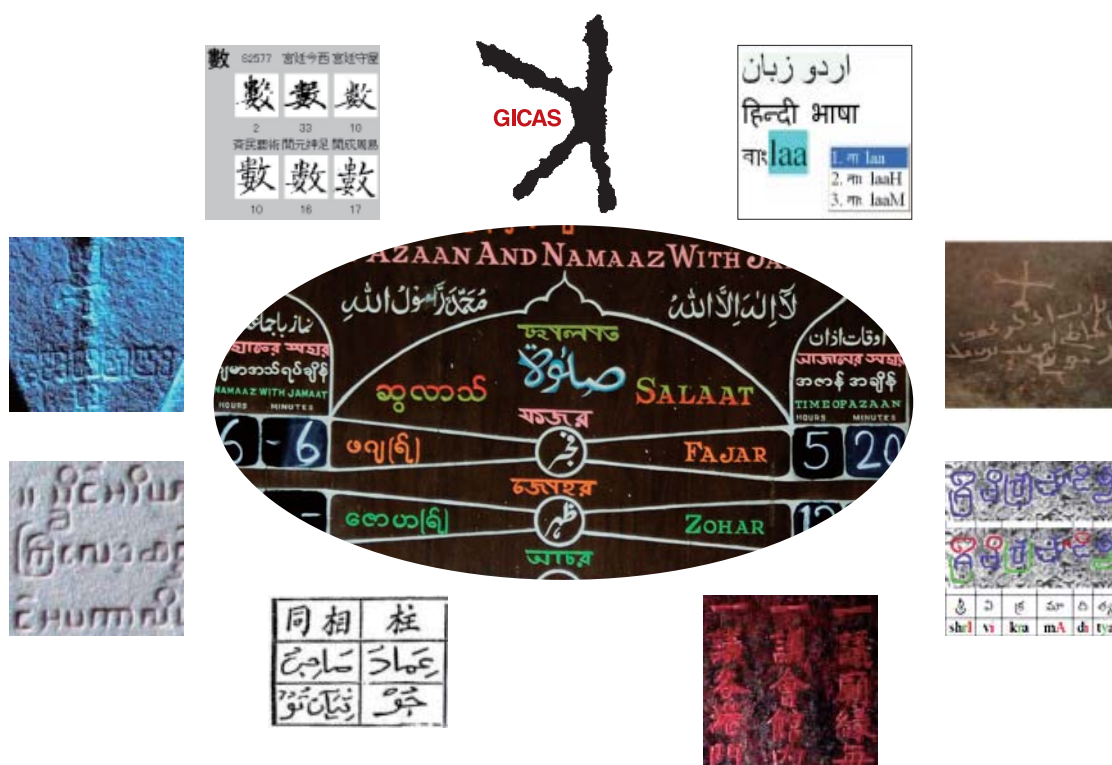
GICASは、研究所の従来の研究活動をいっそう拡充して、統計的解析を行うに十分な規模の資料体(コーパス)としてアジア各地に蓄積される書字文化資料の「アジア書字コーパス」を構築してきました。各地に伝存する碑文・石経、諸宗教聖典の宮廷写本など、本文・字体の双方に規範を示すために作成された聖典書字資料はアジア各地に残存しますが、この電子化を中心とした「アジア書字コーパス」(Corpora of Asian Scripts)は、そこに投影されるアジアでの文字学問研究の伝統と文字使用文化の歴史の電子的な体现であり、「アジア書字コーパス」を現代の情報処理技術で実装することで、検証可能性を持つ新たな学問領域「文字情報学」の創成と体系化の基盤とすることができます。

「アジア書字コーパス」の実装は、文字情報処理に確固たる学問的基盤を与えることを意味し、これによって「アジア書字コーパス」に文字情報学の国際的レファレンス・センターとしての国際的な認知を得て、アジアの文化に根差した文字学研究・文字情報処理においても、我が国が主導的な立場に立つ事を目指すものです。

5年間(平成13年～17年度)の補助金助成が終了したGICASは、平成18(2006)年度より、名実ともにCOE拠点としてひとり立ちしました。研究面では、従来のプロジェクトを継承発展させるとともに、文字情報学の新しいパラダイムの展開に取り組んでいます。具体的には、科学研究費や委託研究費など新たに獲得した各種の競争的研究費による研究プロジェクトを核に研究を推進しています。

平成18(2006)年度よりGICASの本研究所内の組織的運営は、情報資源戦略研究ユニットが担当しています。

GICASは独自のインターネット・ドメインを取得済です。GICASのホームページは<http://www.gicas.jp/>で、そこにこれまでの研究成果などが公開されているので、是非ご覧ください。





文献資料コレクション

本研究所は、1964年の創設以来、全国共同利用研究所として、アジア・アフリカ諸地域の言語・文化の研究のための重要資料を収集してきました。海外約50カ国、150研究機関との間の寄贈・交換によって継続的に収集している資料も多数あります。現在、資料総数は、図書11万冊、雑誌約1,220タイトル、マイクロフィルム1万余リール、マイクロフィッシュ3千余に達し、ほかに古文書、地図、写真、またビデオやCD-ROMなどの媒体もあります。本研究所のみに所蔵される貴重な資料も少なくありません。

たとえば、カンボジア語版南伝大蔵経は、カンボジアの戦乱により現地では散逸しましたが、本研究所蔵本をもとに複製版がつくられ、カンボジアの文化教育機関、寺院に寄贈されて、彼の地の文化復興に貢献しました。また、浅井恵倫旧蔵資料(台湾先住民関係の土地契約文書、動画、写真、語彙集、用例集、フィールドノート、参考文献類)は、海外研究者の協力も得て整理が完了し、研究所ホームページで公開されるとともに、展覧会が開催され、広く関心を集めました(<http://www.gicas.jp/taiwan/>)。

このほかにも、オスマン語劇場ポスター、ナポレオン「エジプト誌：第2版」、19世紀「カイロ石版画集」コレクション、19世紀末からのイランの主要新聞65種、19世紀末に創刊された

ベンガル語文芸雑誌のバックナンバー、中国清代の製糖法を伝える画集、清代台湾民俗図、清代モンゴル語仏典、ロシア帝国で出版されたモンゴル語聖書、満洲国駐タイ公使館文書、日本の植民地官僚で京城帝国大学総長も務めた篠田治策の文書など、貴重な文献資料が所蔵されています。三浦周行旧蔵品も含む朝鮮王朝古文書類コレクションや、清代公文書コレクションは、近年入手したのですが、現在も継続して収集を続けています。

アジア・アフリカ研究における先覚者の個人文庫としては、山本謙吾(満洲語研究)、小林高四郎(モンゴル史研究)、前嶋信次(イスラーム研究)、王育徳(台湾語・文化研究) 諸氏の蔵書があります。

蔵書のうち、一般図書、個人文庫類は附属図書館1階(書庫2層)のAA研コーナーに配架され、貴重書、辞書・辞典・目録等の参考図書、大型本、叢書、マイクロフィルム類、雑誌は研究所棟1階の文献資料室に設置されています。AA研所蔵資料の利用については、

<http://www.tufs.ac.jp/common/library/etc/AAshiryoshitsu.html> をご参照ください。



書架を増設した文献資料室

研究者養成のための教育・広報活動



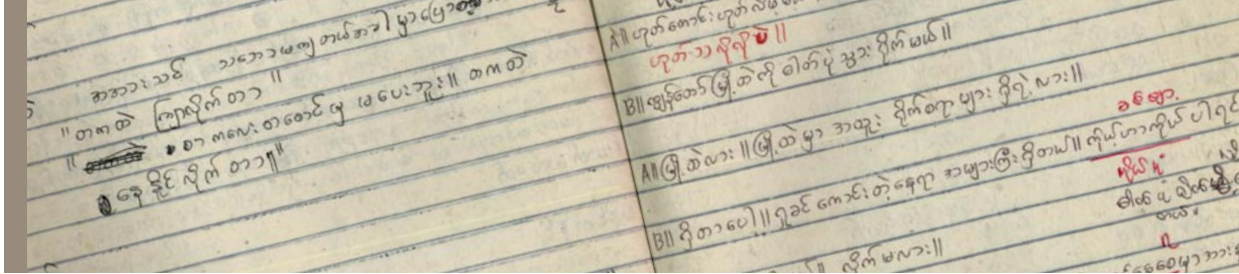
臨地研究に基づく研究拠点

研究資源拠点

国内外の後継研究者 養成のための研修と プロジェクト

- 言語研修40
- 大学院教育／日本学術振興会特別研究員.....41
- 出版物／ウェブサイト42
- 研究成果の公開・社会還元.....44

研究者養成のための教育・広報活動



言語研修

本研究所では毎年、アジア・アフリカ諸言語の短期集中的な研修を実施しています。この言語研修は、次のような目的で行われるものです。

- ・アジア・アフリカ地域の研究を志す初学者に、基礎的な言語運用の訓練を行う。
- ・現地調査や文献研究を行うために必要な言語知識や言語調査の手法など、専門的な知識を教授する。
- ・学習環境が整っていない言語の教材を作成し研修を通じて改良を加えることで、基礎的な学習環境の整備に寄与する。

言語研修は、日本の専門研究者と母語話者とがいっしょに教授にあたる生きた言語教育である点を特徴としています。1974(昭和49)年度以降に研修を実施した言語は、右表の通りです。

実施にあたっては、語学教育に造詣の深い所外の専門委員と担当講師および所員がプロジェクトチームを組み、教授法、実施方法や評価についての議論を行い、効果的な研修を目指しています。関西会場の研修のうち大阪で実施されるものは、大阪外国語大学の協力を得て行われます。

研修生は、大学などの研究機関を通じて全国から公募します。研修を修了した人には審査のうえ、修了書が授与されます。なお、本研究所は、名古屋学院大学及び清泉女子大学と単位互換協定を結んでおり、研修を修了すると、それぞれの大学の卒業単位として認定されます。

また、2006(平成18)年度より東京外国語大学外国語学部および大学院地域文化研究科の開講科目となりました。

■研修言語名(修了者数)

年度	東京会場	関西会場
2007	マレー語、現代ウイグル語	広東語
2006	リンガラ語(4)、サハ(ヤクート)語(10)	朝鮮語中級(5)
2005	ベトナム語中級(4)、シンハラ語(3)	ヒンディー語(8)
2004	ビルマ語中級(6)、ベンガル語(11)	カザフ語(3)
2003	マダガスカル語(11)、スダ語(5)	ベトナム語(11)
2002	ネパール語(8)、パリ語(7)	タイ語(7)
2001	パシュトー語(7)、福州語(10)	ムンダ語(3)
2000	シャン語(3)、アフリカンス語(6)	ペルシア語(4)
1999	フィジー語(4)、ペルシア語(10)	ウルドゥー語(5)
1998	アイヌ語(2)、ハヤ語(11)	カンナダ語(5)
1997	テルグ語(10)、モンゴル語(11)	ハンガリー語(7)
1996	タイ語(14)、現代ヘブライ語(12)	ヨルバ語(7)
1995	アムハラ語(5)、チベット語(25)	上海語(12)
1994	ウォロフ語(9)、ヒンディー語(11)	トルコ語(22)
1993	朝鮮語(17)、グルジア語(17)	モンゴル語(17)
1992	ネパール語(12)、アラビア語エジプト方言(15)	フィリピン語(12)
1991	エストニア語(12)、ビルマ語(15)	中国語(13)
1990	朝鮮語(11)、インドネシア語(11)	ペルシア語(14)
1989	ベンガル語(20)、ベトナム語(9)	アラビア語エジプト方言(15)
1988	ペルシア語(10)、トルコ語(16)	インドネシア語(6)
1987	中原官話(10)、タイ語(19)	シンハラ語(8)
1986	西南官話(5)、タミル語(12)	ベンガル語(8)
1985	朝鮮語(14)、カンボジア語(10)	スワヒリ語(8)
1984	ピリピン語(タガログ語)(12)、ヨルバ語(3)	トルコ語(15)
1983	チベット語(12)、フィンランド語(21)	パンジャブ語(8)
1982	アラビア語エジプト方言(12)、ハンガリー語(17)	フルフルデ語(12)
1981	ヒンディー語(8)、パシュトー語(10)	中国語中級(26)
1980	ネパール語(14)、モンゴル語(14)	ベトナム語(5)
1979	ハウサ語(8)、ビルマ語(14)	タイ語(7)
1978	タイ語(12)、トルコ語(12)	ペルシア語(13)
1977	広東語(14)、マラーティー語(6)	モンゴル語(18)
1976	ペルシア語(10)、スワヒリ語(9)	ビルマ語(5)
1975	カンボジア語(8)、ベンガル語(12)	
1974	朝鮮語(10)、チベット語(12)	

東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所

現代ウイグル語 マレー語 広東語

2007年度
言語研修生募集

【募集期間】2007年5月1日(火)~2007年6月22日(金)
 【研修期間】2007年8月6日~9月7日
 【研修言語】① 現代ウイグル語(東京会場)
 ② マレー語(東京会場)
 ③ 広東語(大阪会場)

【募集人数】各言語10名程度
 【研修時間】①150時間(約126時間) ②126時間

世界の異文化や言語に興味がある方、
 外国語の勉強が好きな方、
 アジア・アフリカ地域の文化や言語に興味がある方、
 専門的な知識を習得する機会を失いたくない方、
 1年間(約10ヶ月)の研修期間中は、
 日本での専門的な研修を受ける機会が、
 異文化の中で学ぶことの特長です。
 異文化の中で学ぶことの特長です。
 研修期間中に学ぶことの特長です。
 研修期間中に学ぶことの特長です。

〒100-8302 東京都千代田区千代田1-3-1 TEL: 03-2306-0000
 E-mail: kango@tamug.ac.jp



大学院教育 / 日本学術振興会特別研究員

大学院教育

東京外国語大学では、多元化した言語・文化・歴史・政治・経済などを統合し、かつ深く掘り下げうる教育者・研究者の育成という学術的な要請と、国際交流の高度化・複雑化に伴う高度な知識を有する国際的な人材や専門職員の需要に応ずるために、言語教育と地域研究をより高度に発達させた大学院地域文化研究科博士後期課程を1992(平成4)年度より設置しました。

本研究所では、教育体制のこうした発展に協力すべく、大学院地域文化研究科に22名(2007年度)の所員が参加し、言語学・人類学・歴史学などの分野における学生を受け入れ、教育活動に従事しています。

これまで、本研究所の所員を主任指導教員として研究を行い、学位を取得した大学院生の氏名、論文題目、学位取得年月日は、以下の通りです。

授与日	学位取得者名	学位論文題目	担当所員
2007.2.21	裾沢 英雄	ゴトン・ロヨン思想 —インドネシア・ナショナリズムの思想として—	根本 敬
2006.9.20	神谷 俊郎	バツア語の記述研究 —その音声、音韻、文法—	梶 茂樹
2006.7.26	古閑 恭子	アカン語アシャンティ方言の研究 —特に音韻を中心として—	梶 茂樹
2006.7.26	結城 佐織	満州語文語における形態と音韻について —『満文金瓶梅』を中心に—	梶 茂樹
2006.2.8	阿部 優子	ベンデ語(バントッフ, 12, タンザニア)の記述研究 —音韻論、形態論を中心に—	梶 茂樹
2006.2.8	李 敬淑	発話速度と促音の生成に関する音響音声学的研究	加賀谷 良平
2003.3.26	Kari, Ethelbert Emmanuel	Clitics in Degema: A Meeting Point of Phonology, Morphology and Syntax.	梶 茂樹
2003.3.26	黒澤 直道	中国少数民族口頭伝承の研究 —ナシ(納西)語音声言語の検討による「トンバ(東巴)文化」の再検討—	クリスチャン・ダニエルス
2002.7.24	菅原 由美	19世紀中部ジャワ宗教運動研究 —アフマッド・リファイ運動をめぐる言説—	宮崎 恒二
2002.3.26	鄧 応文	1990年代における中越経済関係 —国境貿易を中心にして—	クリスチャン・ダニエルス
2002.3.26	高久 由美	漢字形成史研究 —先秦時代の漢字体系における「説文留文」の位置付け—	中島 幹起
2000.12.18	禪野 美帆	村落と都市の紐帯 —メキシコ、オアハカ州サン・マルティン村のカルゴ・システム	宮崎 恒二
2000.6.21	小坂 隆一	A Descriptive Study of the Lachi Language —Syntactic Description, Historical Reconstruction and Genetic Relation—	新谷 忠彦
2000.3.24	米田 信子	マテング語の記述研究(バントゥ系、タンザニア) —動詞構造を中心に—	梶 茂樹
1999.3.26	榮谷 温子	アラビア語における限定・非限定の意味と機能	中野 暁雄
1998.4.22	Soysuda Naranong	日本語の終助詞「よ」「ね」「よね」について —日本語教育の視点から—	新谷 忠彦
1998.3.26	吉枝 聡子	現代ベルシア語の敬語行動に関する社会言語学的研究 —テヘランの場合—	上岡 弘二
1996.3.25	鈴木 貴久子	マムルーク朝時代の料理書『日常食物誌』を中心とする アラブ・イスラーム世界の食生活研究	家島 彦一
1995.3.24	Ricard T. Jose	Food Administration in the Philippines during the Shortage and Occupation, 1942-1945: Focusing on the Rice Countermeasures	池端 雪浦

日本学術振興会特別研究員

本研究所では、優れた研究能力を持つ若手研究者を、「日本学術振興会特別研究員」として受け入れ、所員と共同研究を推進しています。2007(平成19)年度、本研究所に在籍する特別研究員は右表の通りです。

氏名	資格	研究指導者	採用年度
児島 康宏	PD	ペーリ・バースカララーオ	H18～
溝口 大助	PD	真島 一郎	H18～
溝辺 泰雄	PD	永原 陽子	H19～
稲山 円	DC2	宮崎 恒二	H19～
太田 ワランヤ	DC2	峰岸 真琴	H19～



出版物／ウェブサイト

■出版物

本研究所では、言語研修、辞典編纂事業、個人研究、および共同研究プロジェクトを通じたさまざまな研究成果を、民間と共同で編集したものも含め、数多く出版して公開しています。出版物の一覧は、「出版物目録2007」もしくは、本研究所ホームページの中の「AA研の出版物」欄

(http://www.aa.tufs.ac.jp/editcom_j.html) でご覧になることができます。一部の出版物については、同ホームページでpdfでご覧になることもできます。

お問い合わせは、出版事務担当 (publ@aa.tufs.ac.jp) までお願いいたします。

□逐次刊行物

■学術雑誌

『アジア・アフリカ言語文化研究』(Journal of Asian and African Studies) を年に2回発行しています。所外の研究者を含む編集委員会によって運営され、毎号、査読を経た水準の高い言語学・歴史学・文化人類学に関する論文が掲載されています。海外からの投稿も多数あり、国内外から高い評価を得ています。70～72号では、世界15の国と地域から76名(うち、海外35名)の投稿がありました。

62号からは、本研究所ホームページにおいてpdfで閲覧できます。URLは、http://www.aa.tufs.ac.jp/book/aa03_journals_j.htmlです。2006(平成18)年度には右のとおり出版しました。

73号	論文著者名	論文名
論文	五十嵐 大介	ザヒーラ考：後期マムルーク期のスルターン財政
論文	太田 信宏	近世南インド・マイソール王国の宮廷文学における王の表象：『チャッカデーヴァラージャ・サブタパティ』の紹介と分析
論文	片岡 樹	山地からみた中緬辺疆政治史：18-19世紀雲南西南部における山地民ラフの事例から
論文	橘 誠	辛亥革命における内モンゴルの二元的政治構造：二ザサグ制をめぐる
論文	津田 浩司	『華人国家英雄』の誕生：ポスト・スハルト期インドネシアにおける華人性をめぐるダイナミズム
論文	藤波 伸嘉	オスマン・アラブ人の「オスマン国民」像：アブデルハミト・ゼフラーヴィーの「諸民族の統一」論
資料	新谷 忠彦	センウィー・クロニクルに見られるタイ国像(II)：精霊信仰と星占い

■2007(平成19)年度編集委員会委員

上岡 弘二 (東京外国語大学・名誉教授)
 梶 茂樹 (京都大学・大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・教授)
 鷹木 恵子 (桜美林大学・国際学部・教授)
 石川 登 (京都大学・東南アジア研究所・准教授)
 小谷 汪之 (東京都立大学・名誉教授)
 新免 康 (中央大学・文学部・教授)

72号	論文著者名	論文名
論文	SEFATGOL, Mansur	Rethinking the Safavid Iran (907-1148/1501-1736) Cultural and Political Identity of Iranian Society during the Safavid Period
論文	KISHIMOTO, Emi	The Process of Translation in <i>Dictionarium Latino Lusitanicum, ac ponicum</i>
論文	KARI, Ethelbert E.	Aspects of the Syntax of Cross-referencing Clitics in Degema
論文	小沼 孝博	清朝とカザフ遊牧勢力との政治的關係に関する一考—中央アジアにおける「エジェン—アルバト」關係の敷衍と展開—
論文	佐藤 公彦	一八九五年の古田教案 齋教・日清戦争の影・ミッションナリー外交の転換
資料	山越 康裕	シネヘン・ブリヤート語の「抱合」的語形成

■ニュースレター

『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』を年に3回発行しています。本研究所所員や共同研究員などによるフィールドでの経験をもとにしたエッセイ、本研究所が主催した活動の報告、学会などにおける最新の研究動向の紹介、AA研で出版された新刊書の紹介などが掲載されています。102号からは、本研究所ホームページにおいてpdfで閲覧できます。URLは http://www.aa.tufs.ac.jp/book/aa03_journals_j.html です。



表紙「通信」の題字は、初代所長を務めた岡正雄(在任1964～72年)の筆によるものです。



表紙デザインは、グラフィックデザイナー杉浦康平氏によるものです。

■各種出版物

2006(平成18)年度、研究所では、以下の様々な研究活動の成果を出版しました。

□アジア・アフリカ言語文化叢書

本研究所を代表する知的成果を誇る出版物です。所内外の研究者による査読を経て、年に1-2点ずつ出版されています。

著者名	出版物名
稗田 乃	『ナイル諸語比較研究の諸問題 ーナイル語西方言における名詞の語形成法を中心にー』

□共同研究成果出版物

本研究所では、共同研究プロジェクトや中東イスラーム研究教育プロジェクト、所員が外部資金を獲得して行ってい

る研究などの成果を出版しています。

著者・編者・訳者等	出版物の題名	共同研究の名称	共同研究の代表者名	実施年度
伊豆山 敦子(編)	『放送録音テープによる琉球・首里方言ー服部四郎博士遺品ー』	音韻に関する通言語的研究	梶 茂樹	2004-2006
河合 香史(編)	『生きる場の人類学ー土地と自然の認識・実践・表象過程』	土地・自然資源をめぐる認識・実践・表象過程	河合 香史	2002-2004
菅原 純・河原 弥生(編)	『新疆およびフェルガナのマザール文書(影印) 第1集』 (Studia Culturae Islamicae 83)	イスラーム写本・文書資料の総合的研究	羽田 亨一	2003-2006
SEFATGOL, Mansur (ed.)	Persian Historical Epistles from Iran and Mawara an-nahr (Studia Culturae Islamicae 82 (MEIS-2))	イスラーム写本・文書資料の総合的研究	羽田 亨一	2003-2006
		中東イスラーム研究教育プロジェクト	大塚 和夫	2005-2009
中谷 英明(編)	『総合人間学叢書 第1巻』	地球文明時代の世界理解と新しい倫理・人間観の研究	中谷 英明	2004-2006
中谷 英明(編)	『総合人間学叢書 第2巻』			
中山 俊秀・江畑 冬生(編)	『文法を描く 1ーフィールドワークに基づく諸言語の文法スケッチー』	言語の構造的多様性と言語理論ー語の内部構造と統語機能を中心に	中山 俊秀	2005-2009
AALL編集委員会(編)	『アジア・アフリカの言語と言語学(AALL) 1』			
根本 敬(編)	Reconsidering the Japanese Military Occupation in Burma (1942-45) (ILCAA Southeast Asian Studies No.7)	日本占領期ビルマ(1942-45年)に関する総合的歴史研究	根本 敬	2001-2005
峰岸 真琴(編)	『言語基礎論の構築へ向けて』	言語基礎論の構築	峰岸 真琴	2002-2005
RAZAFIARIVONY, Michel	Richesses culturelles et pauvreté économique d'une société orale (Anoisibe an'ala Madagascar)	インド洋海域世界の発展的研究	深澤 秀夫	2001-2005
今枝 由郎ほか7名(編)	Tibetan Documents from Dunhuang (Old Tibetan Documents Online Monograph Series Vol.1)	アジア書字コーパスに基づく文字情報学の創成(GICAS)	ペーリ・パースカララーオ	2001-2005
佐々木 史郎(編)	『北東アジアにおける森林資源の商業的利用と先住民族』	資源の分配と共有に関する人類学的統合領域の構築	内堀 基光	2002-2006

■ウェブサイト



本研究所のウェブサイト (<http://www.aa.tufs.ac.jp/>) では、共同研究を柱とした研究活動の詳細、所員が中心となって推進している大規模なプロジェクトの情報、研究会の案内・記録、研究所刊行物の一覧など、最新の情報を提供しています。さらに、様々なデータベースや辞書、コーパスなど、オンラインで使える研究資料も多数公開しています。

また、研究成果の社会還元の一環として、一般向けコンテンツの制作にも積極的に取り組んでいます。特にここ数年折に触れて開催している企画展のウェブサイトは好評を博しています。



研究成果の公開・社会還元

本研究所は創立以来、全国共同利用研究所として、国内の研究機関に所属する専門研究者に設備や資料を提供する一方、共同研究プロジェクト等の開催を通じて研究交流の機会を作り、日本における当該分野の研究進展に大きな足跡を残してきました。しかし、国際化の進展やアジアの著しい経済成長、またアジア・アフリカにおける民族・宗教

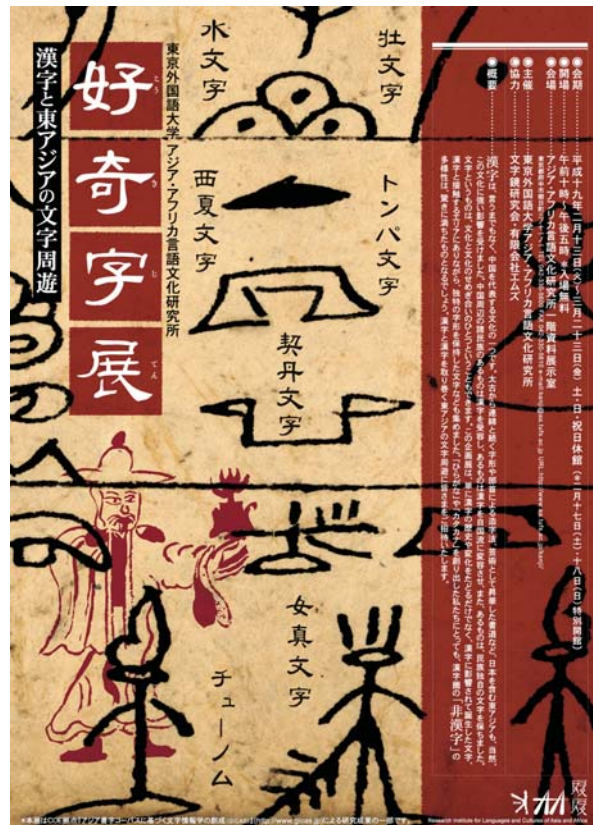
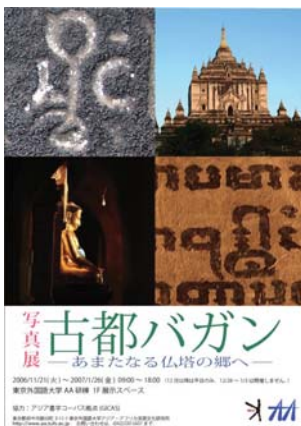
対立の激化など、国際情勢の変化にともなって、本研究所の研究蓄積に対する一般社会の期待は年々大きくなっています。そこで、本研究所もこのような期待に応えるために、研究とともに、「教育」型の社会還元を実施しています。2006(平成18)年度に実施した公開講座・展覧会は以下の通りです。

■公開講座の実施(2006(平成18)年度)

- 国際交流基金・異文化理解講座『中東・西アジア都市周遊—今を生きる歴史都市』
「テヘラン—210年間の首都」(講師：近藤信彰)
- 府中市民カレッジ『中東の人々の多様な暮らし』「ユダヤ教、キリスト教、イスラーム」(講師：飯塚正人)
- 国分寺市立もとまち公民館国際関係講座『キリスト教文化と国際関係』「世界の宗教地図とキリスト教」(講師：飯塚正人)
- フランス国立レユニオン高等美術学校「千一夜物語の挿絵—物語、芸術家、スタイル—」(講師：小田淳一)
- 砧生涯学習セミナー「中東の今を考える—イスラーム文化を知る」(講師：大塚和夫)
- 第41次長野市民教養講座『イスラーム世界の統一性と多様性—中東を中心に』
「ユダヤ教、キリスト教、イスラーム」(講師：飯塚正人)
- 2006年度早稲田大学オープンカレッジ『宗教の世界を垣間見る』「イスラームとは何か」(講師：飯塚正人)
- 2006年度早稲田大学オープンカレッジ『宗教の世界を垣間見る』「イスラーム教徒の冠婚葬祭と日常生活」(講師：飯塚正人)
- 日本工業倶楽部素修会例会「『アラーの神』という誤訳—日本語によるイスラーム理解の諸問題—」(講師：大塚和夫)

■企画展の実施(2006(平成18)年度)

- 2007年2月～3月
「好奇字展—漢字と東アジアの文字周遊」AA研1F 展示スペース
- 2006年11月～2007年1月
「写真展「古都バガン」」AA研1F 展示スペース
- 2006年9月～12月
「臺灣資料展—一九三〇年代の小川・浅井コレクションを中心として」
国立民族学博物館(大阪・千里)





研究スタッフ (2007年5月現在)

1. 研究分野・領域 2. 今年度の研究課題 3. ホームページ

教授



大塚 和夫 OHTSUKA, Kazuo

1. 社会人類学、中東民族誌学
2. 1) 中東を中心としたムスリム社会の人類学的研究
2) 共同研究プロジェクト「ムスリムの生活世界とその変容」



小川 了 OGAWA, Ryo

1. 西アフリカの民族学
2. アジア・アフリカにおける小生産物の研究



栗原 浩英 KURIHARA, Hirohide

1. ベトナム現代史
2. 1) ベトナム・中国関係の歴史の変遷(1950年～現在)
2) ベトナム・中国・ソ連3国関係の変容(1950年代～1960年代)
3) ドイモイにおける社会主義的要素と国際的環境



クリスチャン・ダニエルス DANIELS, Christian 漢名：唐 立

1. 中国西南部：タイ文化圏の歴史
2. 1) タイ文化圏における山地民の歴史的研究(AA研共同研究プロジェクト)
2) 雲南におけるタイ文字文献の調査と保存プロジェクトー臨滄地区(トヨタ財団)
3) 中国歴史班ーアジア熱帯モンスーン地域における地域生態史の総合的研究(総合地球環境学研究所研究プロジェクト)



黒木 英充 KUROKI, Hidemitsu

1. 中東地域研究・東アラブ近代史
2. 1) オスマン期シリアの都市社会の変容過程に関する基礎研究
2) 東地中海地域における人間移動と民族・宗派対立(科学研究費補助金・AA研共同研究プロジェクト)
3) 地域研究による「人間の安全保障学」の構築(日本学術振興会委託研究)
3. <http://www.aa.tufs.ac.jp/~kuroki/>

研究スタッフ (2007年5月現在)

1. 研究分野・領域 2. 今年度の研究課題 3. ホームページ

教授



芝野 耕司 SHIBANO, Kohji

1. マルチメディアデータベース、多言語情報処理、CALL
2. マルチメディアデータベース言語設計、日本語組版、コンピュータ支援による言語教育環境及びe-learning環境の研究



新谷 忠彦 SHINTANI, Tadahiko L. A.

1. 言語音変化の類型的研究
2. 1) タイ文化圏の総合的研究
2) 野鶏の家禽化に関する研究
3) オセアニア諸語の研究



高島 淳 TAKASHIMA, Jun

1. 宗教学・インド宗教史(ヒンドゥー教)、言語情報処理
2. 1) シヴァ教の儀礼と思想についての研究
2) 多言語処理システムの開発研究
3) インド聖典データベースの構築
4) ヒンドゥー教における宗教的空間についての研究
5) マルセル・モースとインドの宗教についての研究
3. <http://www.aa.tufs.ac.jp/~tjun/index.html>



中谷 英明 NAKATANI, Hideaki

1. インド仏教学・中期インド語学・総合人間学
2. 1) インド古典文学学：インド古典語・中期インド語・インド古典韻律の研究
2) インド古代思想研究：バラモン教・インド仏教の哲学的・思想的解明(科学研究費補助金)
3) 総合人間学：「総合人間学の構築」(AA研共同研究プロジェクト)
3. <http://www.classics.jp/GSH/>



中見 立夫 NAKAMI, Tatsuo

1. 東アジア・内陸アジアの国際関係史
2. 1) 「東アジアの社会変容と国際環境」プロジェクト(AA研共同研究プロジェクト)
2) 台湾中央研究院歴史語言研究所所蔵満洲語文書の研究(中央研究院歴史語言研究所)
3) 近代東アジア国際関係史の研究(プリンストン高等研究所)
4) オロン・スム文書を中心としたモンゴル出土文献史料の研究(横浜ユーラシア文化館)

教授



羽田 亨一 HANEDA, Koichi

1. サファヴィー朝期イラン文化史
2. 1) 『ロスタム・ハーン史』の研究
2) ラシードゥ・ウッディーン序・監修『タンスーク・ナーメ』(王叔和『脉訣』のペルシア語訳本)の研究
3) 「ペルシア語文化圏に於ける文字資料の収集と収集資料のデジタル化」(GICAS)



稗田 乃 HIEDA, Osamu

1. アフリカの言語学
2. 1) ウガンダのニール諸語の調査と記述
2) ニール諸語比較語彙集の作成(科学研究費補助金)
3) ドイツに保存されているニール諸語資料の収集と整理



深澤 秀夫 FUKAZAWA, Hideo

1. マダガスカルを中心とするインド洋海域世界の社会人類学的研究
2. 1) マダガスカル北西部農村における会話と相互行為の実地調査(科学研究費補助金)
2) マダガスカルにおける〈移葬〉についての実地調査
3) ホームページの改訂
3. <http://www.aa.tufs.ac.jp/~nfuka/>



ペーリ・バースカララーオ BHASKARARAO, Peri

1. 南アジアの諸言語、音声学
2. 南インド、ニルギリ地域の諸言語研究
3. <http://www.aa.tufs.ac.jp/~bhaskar/index.html>



町田 和彦 MACHIDA, Kazuhiko

1. 南アジアの言語学
2. 1) インド系文字の構造と歴史(GICAS)
2) ヒンディー語電子辞書(GICAS)
3. <http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/>



三尾 裕子 MIO, Yuko

1. 東アジアの人類学
2. 1) 台湾における植民地主義に関する歴史人類学的研究(科学研究費補助金)
2) 「中国系移民の土着化/クレオール化/華人化についての人類学的研究」(AA研共同研究プロジェクト、科学研究費補助金)
3. <http://www.aa.tufs.ac.jp/~ymio/>

研究スタッフ (2007年5月現在)

1. 研究分野・領域 2. 今年度の研究課題 3. ホームページ

教授



峰岸 真琴 *MINEGISHI, Makoto*

1. 東南アジア、南アジアの言語学および言語類型論
2. 1) 孤立語を視野に入れた言語基礎論・言語類型論の研究
2) コミュニケーションとその障害に関する研究
3) タイ、インドの少数民族言語の研究
3. <http://www.aa.tufs.ac.jp/~mmine/index-j.html>



宮崎 恒二 *MIYAZAKI, Koji*

1. オーストロネシア社会
2. 1) 国際移住に関する文化人類学的研究 (科学研究費補助金)
2) インドネシア文献学の研究
3. <http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmiya/profile-sjis.html>

准教授



荒川 慎太郎 *ARAKAWA, Shintaro*

1. 西夏語学、西夏語文献学
2. 1) 西夏語文献の言語学的研究
2) 西夏時代の河西地域における歴史・言語・文化の諸相に関する研究 (科学研究費補助金)
3) 遼・金・西夏に関する総合的研究 (言語部門統轄) (共同研究プロジェクト)
3. <http://www.aa.tufs.ac.jp/~arakawa/index.html>



飯塚 正人 *IIZUKA, Masato*

1. イスラーム学・中東地域研究
2. 1) 9.11後のイスラーム世界におけるイスラームフォビア意識の浸透に関する研究 (科学研究費補助金)
2) 地域研究による「人間の安全保障学」の構築
(日本学術振興会人文・社会科学振興のためのプロジェクト研究事業)
3. http://www.aa.tufs.ac.jp/~masato/intro_me.html



太田 信宏 *OTA, Nobuhiro*

1. 南アジアの歴史
2. 1) 近世南アジアにおける国家的儀礼と政治文化の研究
2) 南インド史上の諸社会集団の結合形態とその歴史の変遷の研究
3) 前近代カンナダ語文学史に関する基礎的研究

准教授



小田 淳一 ODA, Jun'ichi

1. 計量文献学
2. 1) 民話の計量的比較研究
2) 情報修辞学
3. <http://www.aa.tufs.ac.jp/~odaj/index.html>



河合 香吏 KAWAI, Kaori

1. 人類学、東アフリカ牧畜民研究
2. 1) 東アフリカ牧畜民の遊動再考
2) ウガンダ・カラモジャの牧畜民の空間認識と地図表象化に関する調査・研究(科学研究費補助金)
3) 「集団」概念の進化的基盤研究(AA研共同研究プロジェクト)



呉人 徳司 KUREBITO, Tokusu

1. 言語学、チュクチ語、モンゴル語
2. 1) 海岸チュクチとトナカイ・チュクチに関する言語学、言語人類学的研究
2) 消滅の危機に瀕している言語に関するより効率的な調査・記述方法の研究
3) 言語類型論の研究
3. <http://www.aa.tufs.ac.jp/~tugusk/>



近藤 信彰 KONDO, Nobuaki

1. イラン近代史
2. 1) 宗教寄進文書の分析による19世紀テヘランの都市史研究
2) シーア派の法的勸告と法廷文書に関する研究
3) 近世・近代ペルシア語文化圏における言語・民族・国家形成(科学研究費補助金)



澤田 英夫 SAWADA, Hideo

1. カチン州および東北インドのチベット=ビルマ系言語の記述的研究
2. 1) ロンウォー(マル)語の文法記述
2) 「東南アジア諸文字の源流と発展」(GICAS)の調査で得た
東南アジア大陸部インド系文字碑文画像データの整備
3. <http://www.aa.tufs.ac.jp/~sawadah/>



塩原 朝子 SHIOHARA, Asako

1. 言語学、インドネシア諸言語の記述的研究
2. ヌサトゥンガラ諸島の言語(バリ語、スンバワ語、クイ語(アロール)など)の記述
3. <http://www.aa.tufs.ac.jp/~asako/profile-sjis.htm>

研究スタッフ (2007年5月現在)

1. 研究分野・領域 2. 今年度の研究課題 3. ホームページ

准教授



陶安 あんど SUEYASU/HAFNER, Arnd Helmut

1. 法社会学、中国法制史と中国古文字学
2. 1) 秦漢刑罰体系の研究
2) 金文法制資料の研究
3) 中国古文字偏旁体系の研究



高知尾 仁 TAKACHIO, Hitoshi

1. 文化人類学・人類学精神史
2. 1) ジェイムズ・フレイザー研究
2) モダニティの表象
3) imperiumの言説と表象に関する基本研究



床呂 郁哉 TOKORO, Ikuya

1. 東南アジア島嶼部の人類学
2. 1) 東南アジアのイスラームに関する研究
2) 真珠を含む小生産物の研究
3) 「海賊」に関する歴史人類学的研究



豊島 正之 TOYOSHIMA, Masayuki

1. 中世日本語文献学(特にキリシタン文献)
2. 1) 宣教に伴う言語学(Missionary Linguistics)関連辞書・文法書統合化研究
2) 漢字字体史研究のための関連資料研究(GICAS)
3) 極初期録音音源による百年前の言語音声と書記記録との関係の研究(GICAS)
3. <http://www.joao-roiz.jp/mtoyo/>



永原 陽子 NAGAHARA, Yoko

1. 南部アフリカの歴史
2. 1) 植民地期ナミビア史の再構築
2) 脱植民地化の双方向的歴史過程における「植民地責任」の研究
(AA研共同研究プロジェクトおよび科学研究費補助金)



中山 俊秀 NAKAYAMA, Toshihide

1. ワカシュ語(北米北西海岸)、形態・統語論、言語類型論
2. 1) 複統合性についての研究
2) 語類に関する通言語的研究
3) ノートカ語テキスト資料の整理・分析・編集
3. <http://www.aa.tufs.ac.jp/~nakayama/>

准教授



西井 涼子 NISHII, Ryoko

1. 東南アジア大陸部の人類学
2. 1) 社会空間についての人類学的研究
2) タイにおけるマイノリティとしてのムスリム研究
3. <http://www.aa.tufs.ac.jp/~rmishii/>



星 泉 HOSHI, Izumi

1. チベット文化圏の言語学
2. 1) 現代チベット語文法研究（使役構造および格標示の研究）
2) チベット語辞典編纂
3) 古代チベット語テキスト研究（碑文における語彙・文法研究）
3. 研究室 <http://star.aa.tufs.ac.jp/> 古代チベット語文献オンライン <http://otdo.aa.tufs.ac.jp>



真島 一郎 MAJIMA, Ichiro

1. 西アフリカの人類学
2. 1) ウフェ=ボワニの統治倫理をめぐる人類学的研究
2) 輸出用作物生産の人類学的研究
3) マルセル・モース研究
3. <http://www.aa.tufs.ac.jp/~imajima/profile.html>

助教



新井 和広 ARAI, Kazuhiro

1. 中東研究、東南アジア研究、インド洋海域史
2. 1) ハドラマウト地方と東南アジアを結ぶウラマー・ネットワーク
2) ハドラマウトの聖者と聖者廟に関する基礎研究



伊藤 智ゆき ITO, Chiyuki

1. 音韻論、歴史言語学、朝鮮語、中国語中古音
2. 1) 朝鮮語声調の総合的研究
2) 19世紀中国語－朝鮮語対音の音韻論的研究

研究スタッフ (2007年5月現在)

1. 研究分野・領域 2. 今年度の研究課題 3. ホームページ

助 教



椎野 若菜 SHIINO, Wakana

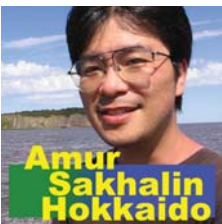
1. 社会人類学、東アフリカ民族誌
2. 1) 寡(やもめ)の処遇とその生活実践に関する研究
2) 「シングル」に関する研究
3) 居住集団と居住形態に関する研究
4) 生業活動、物質文化(壺づくり)とジェンダーに関する研究

非常勤研究員



角谷 征昭 KADOYA, Masaaki

1. バンツー諸語
2. マリラ語とニハ語(タンザニア)の記述および対照研究



丹菊 逸治 TANGIKU, Itsuji

1. ニヅフ民族、アイヌ民族の言語および口承文学研究
2. サハリン・アムール地域の民族音楽アンサンブル運動研究
3. <http://sakhalin.daa.jp/>



永井 佳代 NAGAI, Kayo

1. エスキモー語、形態・統語論
2. 1) シベリア・ユピック語の資料の整理、分析
2) シベリア・ユピック語の再活性化、コミュニティを離れて育った子供への言語教育



長崎 郁 NAGASAKI, Iku

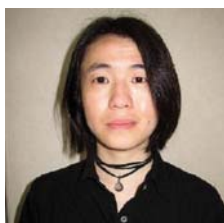
1. 言語学、ユカギール語
2. 1) コリマ・ユカギール語の文法記述
2) コリマ・ユカギール語資料の整理、分析

非常勤研究員



錦田 愛子 NISHIKIDA, Aiko

1. 中東地域研究
2. 1) 離散パレスチナ人の帰属意識についての研究
2) 中東をめぐる映像メディアに関する研究



渡部 良子 WATABE, Ryoko

1. 歴史学・前近代イラン
2. 1) ペルシア語の伝統的書記術観とその変容
2) モンゴル時代のイラン社会・文化史



菅原 純 SUGAWARA, Jun 産学官連携研究員

1. 中央アジア史(19-20世紀中国領中央アジア/新疆史)
2. 1) 省制期新疆一般契約文書史料(テュルク語)に依拠した19-20世紀カシュガル、ホタンの社会状況
2) イスラーム聖者廟(マザール文書)
3) 現代ウイグル人の言語文化
3. <http://www.uyghur.jp>



塩谷 もも SHIOYA, Momo 産学官連携研究員

1. インドネシアの人類学
2. 1) ジャワの儀礼と女性に関する研究
2) 再イスラーム化に関する研究
3) 相互扶助に関する研究

研究スタッフ (2007年5月現在)

1. 研究分野・領域 2. 今年度の研究課題

外国人研究員

*は出身国と着任期間を表す



MILNER, Anthony (アンソニー・ミルナー)

1. 東南アジア史
 2. 東南アジアにおける国民国家と地方社会の関係ダイナミクス
- *オーストラリア 2006.9.1-2007.8.31



BEISEMBIEV, Timur Kasymovich(ティムール・カスイモヴィッチ・ベイセンビエフ)

1. 歴史学
 2. 近代中央アジア史に関する研究
- *カザフスタン共和国 2006.9.1-2007.8.31



DONG, Shan(董(トウ) 珊(サン))

1. 中国古文字学、先秦史
 2. 1) 戦国官府制度研究
2) 西周金文研究
3) 戦国文字・簡牘文字と歴史考古学の研究
- *中国 2006.9.1-2007.8.31



JANHUNEN, Juha Antero(ユハ・アンテロ・ヤンフネン)

1. ウラル語族、アルタイ諸言語
 2. ユーラシアにおける言語の拡張
- *フィンランド 2006.12.1-2007.6.30



LESTEL, Dominique Pierre(ドミニク・ピエール・レステル)

1. 動物行動学、哲学、認知心理学
 2. 道具・コミュニケーション・合理性：人間と動物の文化的行動
- *フランス 2007.3.1-2007.6.30

予算 (2007年5月現在)

■2007年度予算額（運営費交付金・間接経費）※常勤人件費除く

(単位:千円)

運営費交付金	下記以外		158,535
	特別教育研究経費	中東イスラーム研究教育プロジェクト	72,000
		アジア・アフリカの言語文化に関する共同研究	33,590
補助金間接経費（AA研配分類）			17,532
計			281,657

■2007年度予算内訳

(単位:千円)

事項	配分類	
個人研究費	11,111	個人研究費
客員研究費	2,090	外国人研究員研究費
ユニット経費	12,800	ユニット研究費
I R C 経費	33,000	I R C 経費、共同利用設備
F S C 経費	39,450	F S C 経費（中東・イスラーム研究/教育セミナー、海外拠点等含む）
言語研修経費	12,300	言語研修、新型言語研修
辞典編纂経費	900	インフォーマント調査
成果等刊行経費	30,260	ジャーナル、要覧、通信、叢書、基礎語彙集、共同研究プロジェクト出版物、編集委託費
プロジェクト経費	14,917	共同研究プロジェクト研究旅費、短期共同研究員
文献資料経費	11,000	図書関係資料、文献資料
国際研究集会経費	3,383	国際研究集会開催経費、国際研究集会招聘帰国・派遣旅費
未開発言語文化派遣経費	4,200	研究未開発言語文化派遣、中東・イスラーム関係研究未開発派遣
展示等経費	3,320	展示会
共通経費	10,000	共通経費(消耗品、各種修理代、出版物発送代 等)
外部委員経費	2,700	運営諮問・共同利用・専門委員会、編集委員会
会議等経費	1,000	会議等出席旅費等
所長裁量経費	2,900	
非常勤研究員人件費	27,730	
外国人研究員人件費	33,400	
R A 経費	800	リサーチアシスタント給与
派遣職員経費	19,436	所長秘書、全国共同利用係派遣職員、GICAS派遣職員、広報担当
予備費	4,960	
合計	281,657	

予算 (2007年5月現在)

■2007年度外部資金受入額

科学研究費補助金 (直接経費)		受託研究費・受託事業費 他	
基盤 A (海外、一般含む)	53,500千円 / 8件	57,042千円 / 5件	
基盤 B (海外、一般含む)	26,100千円 / 8件		
基盤 C	10,200千円 / 10件		
萌芽研究	1,000千円 / 1件		
若手研究	8,200千円 / 8件		
特別研究員奨励費(PD)	3,300千円 / 3件		
		計	159,342千円 / 43件

※研究成果公開促進費除く

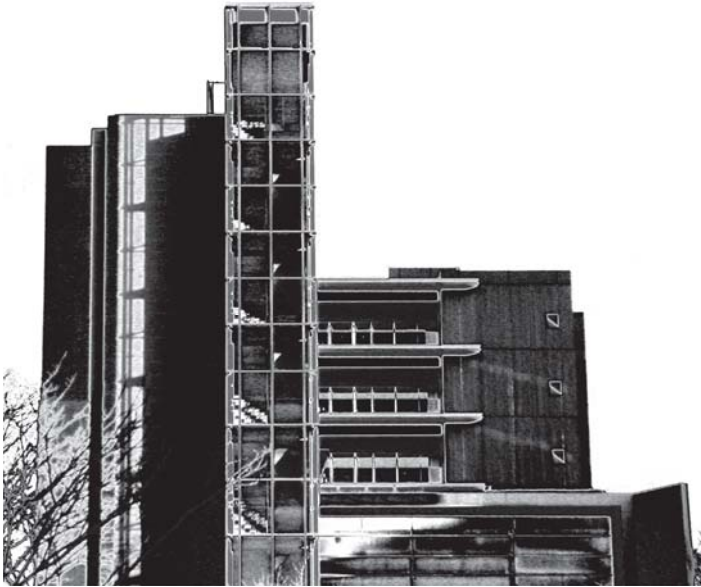
■歳出決算額(運営費交付金)

(単位：千円)

区 分	2004年度	2005年度	2006年度
人件費	525,000	525,000	467,045
物件費	23,100	238,000	197,421
補助金間接経費 (AA研配分額)	26,550	19,980	9,660
計	782,550	782,980	674,126



マジュンガ州マダガスカル共和国北西部地方に居住するツィミヘティの人びとは、葬式の際に牛を殺して集まってくれた人びとにふるまい、牛の頭は墓に持って行き、杭や枝にかけておく。11月1日の万聖節頃は、この地方では墓参の日。この日墓のある山頂に村人と共に登ると、牛の頭蓋骨が乾季の青空の中にすくっと立っていた。
撮影者：深澤秀夫



2004年度より、「東京外国語大学」は、「国立大学法人」として新しく生まれ変わりました。これにともない、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所では、「アジア・アフリカ言語文化研究所」の名称ならびに本研究所の略称である「AA研」と左記のロゴマークの商標登録査定を特許庁に申請し、平成17年8月19日付で商標登録証が発行され、商標として登録されました。

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1

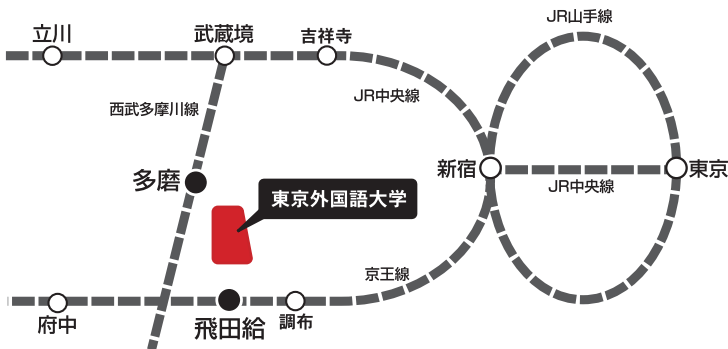
TEL 042-330-5600 FAX 042-330-5610

MAIL ilcaa@aa.tufs.ac.jp

URL <http://www.aa.tufs.ac.jp>

Research Institute for Languages and
Cultures of Asia and Africa,
Tokyo University of Foreign Studies,
3-11-1 Asahi-cho, Fuchu-shi, Tokyo, 183-8534, Japan
phone +81-(0)42-330-5600, fax +81-(0)42-330-5610

AA研へのアクセス

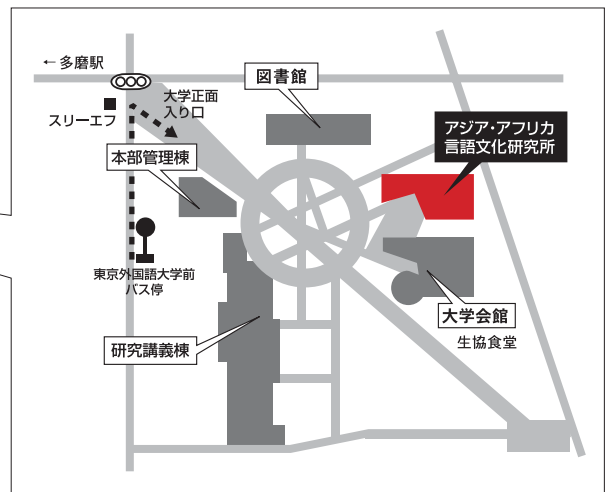
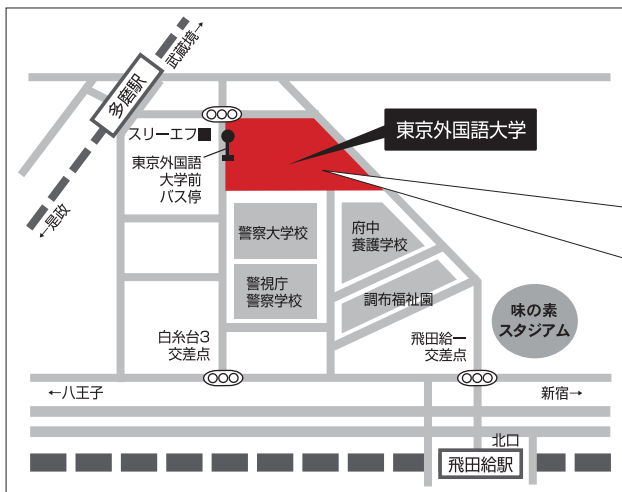


■ JR中央線「東京」駅～「武蔵境」駅、約40分
JR中央線「新宿」駅～「武蔵境」駅、約20分

■ JR中央線「武蔵境」駅より西武多摩川線に乗り換え、「多磨」駅下車、駅より徒歩約5分。

■ 京王線「飛田給」駅北口または「調布」北口より多磨駅行きバス乗車、「東京外国語大学前」停留所下車、停留所より徒歩2分。「飛田給」駅北口から約13分間隔でバスが運行。所要時間約7分

「調布」北口からは20～30分間隔で運行。所要時間約20分。
バス時刻表は <http://www.bus-navi.com/>



■表紙の写真について

[ディサベの日のひとコマ] この日の朝10時ごろから、翌日行われる嫁送りの祝いのために、女たちが粳米を持ち寄り、共同で米を搗く「ディサベ」が始まった。米搗きも終わるころ、嫁いでゆく女の子の母親からコーヒーや酒が参加者全員にふるまわれ、昼ごろには老いも若きも歌ったり踊ったりの大宴会。そんな母親や姉たちのいつ果てるとも知れない騒ぎを、かたわらで男の子たち二人が愉快そうに見ていた。

撮影場所: マダガスカル共和国マジュンガ州北部地方

撮影者: 深澤秀夫 撮影日: 2005年10月29日